

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1985. Vol. 6, 63~104

規則－懷疑論の問題

The Problem of Rule-scepticism

岡 田 雅 勝

Masakatsu OKADA

序

クリプキは「規則と私的言語に関するウィトゲンシュタイン」(註1)において、ウィトゲンシュタインの「哲学探究」の138-242節における〈規則及び規則に従うこと〉をめぐるウィトゲンシュタインの考察に懷疑的解釈を与え、私たちに論議を呼び起こした。クリプキのこの懷疑的解釈に対して真正面から疑問を提出し、ウィトゲンシュタインの本来の思索に引き戻し、ウィトゲンシュタインの本来的に意図としていたものの何かをはっきりと示すことによって、クリプキの議論の過ちを鋭く指摘したのが、G. P. ベーカーと P. M. S. ハッカーの「懷疑論、規則、言語」(1984年)であった。

ベーカーとハッカーは、クリプキの提出したウィトゲンシュタイン解釈を〈規則－懷疑論〉と呼び、その規則－懷疑論を徹底的に吟味し、批判するのであった。小論の試みは、ベーカーとハッカーのクリプキの解釈に対する批判的観点を導きとして、ウィトゲンシュタインが「哲学探究」において主張しているものは何かを説明することにある。そこで、まずここでクリプキのウィトゲンシュタイン解釈の要点が一体どこにあったのかを辿ることから始めたい。

クリプキは、「哲学探究」(以下「探究」とする)における〈私的言語〉に関する一般的な解釈が「探究」の243節で始まり、それ以降の節において展開されているとされている、いわゆる〈私的言語論〉とは違った解釈を下し、〈私的言語論〉は243節に先立つ節において見い出されるべきであり、とりわけ、202節において〈私的言語論〉の結論がはっきりと述べられていると主張し、「私はここで(202節)でウィトゲンシュタインが後に詳細に

論じることになる議論（私的言語論）を予期していたとは考えない。反対に、決定的な考察は、202節において述べられている結論に至る議論に全て含まれている。243節以降の諸節はそれに先立つ議論に照らして読まれるように意図されている」（註2）と述べている。つまりクリプキの主張は、202節を結論であるとして、一般的に243節以降が〈私的言語論〉とされている解釈に対して異議を唱え、138—242節までで〈私的言語論〉の問題が202節において全て結論づけられているということにある。クリプキに従えば、さらに、これらの箇所で行き渡られている問題は、ただ単に〈私的言語論〉の問題だけではなく、「探究」の中心問題を論じているというのである。「138—242節は懷疑の問題とその解決を取り扱っている。これらの諸節—「探究」の中心問題—はこの書の本来の関心である」（P 79）と述べ、クリプキは規則及び規則を巡るパラドックスに言及している「探究」の201節に注目し、それを懷疑論のパラドックスと呼び、この問題を「探究」全体の根本問題と解釈し、その問題の展開をするのである。ペーカーとハッカーは、クリプキによって解釈される私的言語に関する議論、規則及び規則をめぐるパラドックスに関する議論を〈規則—懷疑論〉と呼ぶのであるが、この懷疑論は、クリプキに従えば、これまでの懷疑論とは違った、「哲学的懷疑論の新しい形態」（註3）であり、ウィトゲンシュタインは「探究」においてこの新しい形態の懷疑論を展開しているのである。

私たちの関心は、さしあたってまず、クリプキの解釈する懷疑論的パラドックスの何かを辿り、クリプキの規則—懷疑論とは何かを問い、それがクリプキの言うように果たして新しい形態の懷疑論なのであるのかどうかを問うことにある。後期ウィトゲンシュタインの取り組んだ問題は心理学の哲学であり、数学の哲学であり、そしてこの二つの哲学に共通する問題であった。こうした問題を省察した彼の思索の深さが私たちに様々な解釈の可能性をよびおこしている。クリプキの解釈はまさしくウィトゲンシュタインの省察の豊かさと深さを証明するものである。クリプキは〈懷疑論的パラドックスの問題〉を展開するにあたり、ウィトゲンシュタイン議論を精密に提示するという方法を取らずに、別な言い方をすればウィトゲンシュタインが是認しないかもしれない方法で、ウィトゲンシュタインを解釈しようとするものであった。「この書は〈ウィトゲンシュタイン〉の議論の解説でも、〈クリプキ〉の議論の解説でもなく、むしろクリプキの心を打った限りの、クリプキに問題を提示した限りのウィトゲンシュタインの議論の解説として考えられるべきである」（P 5）と述べているように、彼自身のウィトゲンシュタインに対するアプローチは、いわゆるウィトゲンシュタインの文献学的理解にあったのではなかった。その意味では、私たちがウィトゲンシュタインの資料をつきつけて、クリプキの誤りを匡すという方法を取ることは、クリプキの議論の真の狙いの何かを理解しないことを意味することになる。私たちのクリプキへの関心はクリプキのウィトゲンシュタイン議論の正しさにあるのではなく、クリプキの解釈を通して、ウィトゲンシュタインを再考察するときにウィトゲンシ

ユタインが私たちにとって新しい装いでもって見られるのかどうかということにある。そしてその議論が私たちの思索に大いなる刺激を与えるものなのかどうかにある。私たちはウィトゲンシュタイン議論が豊かで深遠であるがゆえに、多様な解釈の可能性を与えているという前提に立つし、そしてクリプキが述べているように、「探究」は沈黙させられることのない、想像的な対話者によって表現された苦勞にみちた諸問題が提起された〈永遠の弁証法〉として書かれている書であると受け取る。さらにまた、「探究」が結論として明確なテーゼに導くような演繹的議論の形式では提示されてはいないので、同じ根拠が種々の特殊な観点及び角度から繰り返し取り扱われている(註4)というクリプキの指摘のように、私たち自身がウィトゲンシュタインが提出した問題を受け取ることが要求されているのである。それゆえ、ウィトゲンシュタイン解釈がどのようになされたとしても、それなりに評価が与えられるべきであるという見解に小論は立つ。とは言え、その解釈にさしてウィトゲンシュタインの哲学的精神というものにそくすることが当然のこととして課せられているのであって、その意味では、なされた解釈はあくまでもウィトゲンシュタインの哲学的精神を汲んでいるものでなければならないであろうし、私たちに新たな思想の息吹を与えるものでなければならないであろう。私たちの関心は、それゆえクリプキの解釈がたとえ様々に批判を受けたとしても、究極的にはウィトゲンシュタインの哲学的精神にそっているのかどうかにある。この小論は、以上の諸問題に関心を向け、クリプキ議論に私たちが特に学ぶべきものは何かを探ることにある。クリプキのこの議論が提出されると、この議論を巡って私の知る限りでも、既に幾つかの論文の発表及び著述がなされている(註5)。

そうした中であって、この小論が導きとしているペーカーとハッカーの「懷疑論、規則、言語」はクリプキの規則—懷疑論の徹底的な批判に向けられているが、私は、彼らのクリプキ批判を批判として受け入れ、そこからクリプキ議論そのものが果たしてウィトゲンシュタインの哲学的精神にそくしているのかどうかを判断する指針としたい。この小論の狙いは、クリプキ議論の理解にあり、そしてそれをとおして究極にウィトゲンシュタイン理解にあるが、そのためにも、まずクリプキの議論の何かを辿り、それがどのように批判を受けているのかを吟味することにある。この小論の構成は、二部に分けられている。ここでは、そのうちの前半、つまり一部だけを取り扱う。したがって、この小論の焦点はクリプキ議論の何かとその議論の批判にとどめ、クリプキ議論そのものの評価は、次の論文において取り扱う予定である。

I クリプキ議論の諸問題

懷疑論のパラドックス

「探究」の核心的議論はクリプキの解釈に従えば、真の〈私的語論〉は243節以降にあるのではなく、138—242節にあり、その議論の結論は202節に述べられているのである。それは、次のようである。

「それゆえ、〈規則に従う〉ということは一つのプラクシスである。そして規則に従っていると思うことは、規則に従っていることではない。したがって、ひとは〈私的に〉規則に従うことはできない。そうでなければ、規則に従っていると思うことが、規則に従っていることと同じことになるからである」(202節)。

クリプキの解釈によれば、ウィトゲンシュタインがここで取り組んでいる問題は懷疑的問題なのである。したがって、クリプキによれば、ウィトゲンシュタインのアプローチの基本的構造は、まず、「規則」の概念に関して、〈懷疑論パラドックス〉が提示され、それに続いて、それに対する〈懷疑的解決〉が提示されるのである(p. 4)。クリプキは、規則に関する〈懷疑論的パラドックス〉を「探究」の核心的問題の結論として受け取るのであるが、それは「探究」の201節に述べられているものである。

「私たちのパラドックスは、規則が如何なる行動の仕方も決定できないということ、というのは、どのような行動の仕方もその規則と一致させることができるから、ということにあった。その答えは、どのような行動の仕方も規則と一致させることができるならそのときまた矛盾させることもできるということであった。それゆえ、ここでは一致も矛盾も存在しないであろう」(201節)。

この〈懷疑論的パラドックス〉は、クリプキに従えば、加法の規則のように、数学における規則の概念と、そして感覚及びほかの内的状態に関する私たち自身の内的経験について私たちが語る場合に生じるのである。ウィトゲンシュタインのパラドックスの議論は、彼が後期において省察した、ウィトゲンシュタインの数学の哲学及び心理学の哲学から導かれた結論であり、したがって、一見して異なったように思われる数学の哲学と心理学の哲学は決して離ればなれな議論でも、考察でもなく、同一の基本的考察を含んでいるとクリプキは主張するのである。言い換えれば、こうした懷疑の問題は言語のあらゆる有意味な使用に適用される問題であると主張するのである。クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインが201節及び202節において結論に導いた〈私的言語に関する議論〉は、カント的な問いを問うことから導かれたのであった。つまり、ウィトゲンシュタインは言語の可能性を問うたのであった。「私たちは如何にして言語というものが〈公的であれ、私的であれ、

どんなものであれ、言語というものが) 一体可能であることを示すことができるのか」と問い、そしてウィトゲンシュタインは、「全ての言語、全ての概念構成が不可能であり、実際に理解不可能であるということを示したと思われる」(P 62) と言うのである。このように導かれた結論こそ、新しい形態の懐疑論であるというのがクリプキの主張である。したがって、私的言語の不可能性の議論は、これまで論じられたように、〈痛み〉などの感覚の私秘性の問題に関わるのではなく、そもそも言語そのものの可能性の問題に関わる議論として提出されているとクリプキは主張しているように思われるのである。それでは、クリプキは一体どんな論拠によって懐疑論をウィトゲンシュタインの議論から引き出そうとしているのであろうか。

クリプキのパラドックス

クリプキは「探究」の201節において述べられている規則に関するパラドックスを彼独自の方法でもって展開している。そのために彼が用いた例は、数学のプラス関数つまり加法の計算である。「68+57」という加法の答えをめぐって、クリプキは懐疑論的パラドックスの問題を提起する。クリプキの問題提起は、次の点にある。

私は〈プラス〉という言葉と〈+〉という記号を加法の関数を表すために用いる。この関数は整数のあらゆる加法に適用されるように定義されている。私が過去において計算したのは有限回だったとしても加法の規則を了解したならば、私がこれまで考えたことのない、数限りない、多くの加法の計算問題に対しても、加法の規則は答えを決定する。したがって、例えば〈68+57〉という計算は、私がこれまで一度も計算したことのない問題であるとしよう。私が過去において加法のさいに意図していたのと同様に、その和を求め、125の答えを導いたとしよう。この答えは、算術的にもメタ言語的にも正しい答えだと言えよう。ところで、ここで奇妙な懐疑論者が私の答えの正しさに対してメタ言語的な意味で疑問を投げかけたとしよう。そして私の過去において、〈プラス〉というコトバを用いたとき、〈68+57〉の計算に対する私の意図していた答えは〈5〉であったのに違いないと彼が言ったとしよう。この懐疑論者は、私が今私自身のそれ以前の用法を誤って解釈していると言い、次のような奇妙な定義を与える(註6)。

$$x + y = x + y \quad (x, y < 57 \text{ の場合})$$

$$x \oplus y = 5 \quad (x, y > 57 \text{ の場合})$$

過去において、私は加法の計算をしたのは具体的な事例を有限回しただけであり、それもどの数も全て57より小さな数と数の計算であった。したがって、私は恐らく過去において、〈プラス〉と〈+〉とを〈クワス〉と呼び、〈+〉によって表す関数のために用いていたかも知れない。つまり懐疑論者の主張は〈プラス〉によって、私は常に〈クワス〉ことを言

っていたに違いないというのである。それに対して、私はそんなことはまったくのナンセンスであり、加法の勉強を始めからやり直しなさいと言うことができよう。私は $\langle 68+57 \rangle$ の計算をするときには「この計算がこれまで一度もしたことのない計算だと仮定して」、私は前もって自分に与えた指示に従って、この指示によって新しいケースの計算に対して、答えが $\langle 125 \rangle$ であると答えるとしよう。あるいはまた私はこれまで常にしてきたことと同じことをしている、つまり私はこれまで与えられた事例で示されている規則に従って計算していると答えたとしよう。こうした私の答えに対して懷疑論者は、第一に、私が $\langle$ クワス $\rangle$ ではなく、 $\langle$ プラス $\rangle$ を意味していたという何らかの事実が私に存在するのかと問う。第二に、この計算において、 $\langle 5 \rangle$ ではなく、 $\langle 125 \rangle$ という答えを確信する何らかの理由を私は持っているのかと問う。ここでは、私の計算の正確さとか記憶の正しさが問題とされていない。懷疑論者も $\langle 125 \rangle$ の計算が $\langle$ クワス $\rangle$ ではなく、 $\langle$ プラス $\rangle$ の計算であるなら、 $\langle 125 \rangle$ という答えに異存があるのではない。懷疑論者は $\langle$ クワス $\rangle$ の計算も、 $\langle$ プラス $\rangle$ の計算も出来るのである。また、私と懷疑論者は違った言語を用いるのではなく、共通の言語でもってコミュニケーションをしていることがここでは前提とされている。

懷疑論者は、ただ単に $\langle$ プラス $\rangle$ に関しての私の現在の用法が私の過去の用法と一致しているのかどうか、私は現在これまでの私の加法に関する意図と一致しているのかどうかを問題としているのである。つまり私が $\langle$ クワス $\rangle$ ではなく、 $\langle$ プラス $\rangle$ を意味していたという事実を私に問い、 $\langle 125 \rangle$ という答えを如何にして正当化するかを彼は私に問うのである。「もし $\langle$ プラス $\rangle$ というコトバが、私が過去において用いたようにプラス関数ではなく、クワス関数を示しているならば、そのとき私の過去の意図は、 $\langle 68+57 \rangle$ の値が問われれば、私は $\langle 5 \rangle$ と答えたに違いないということである」(P23)。より詳細に述べるなら、懷疑論の問題提起は、なぜ私は現在、私が過去において $\langle$ プラス $\rangle$ でもってクワス計算法ではなく、加法を意味していたということを信じているのかということである (P23)。もし私が加法を意味していたなら、そのとき私は $\langle 125 \rangle$ と答えるべきであり、クワス計算法を意味していたなら、私は $\langle 5 \rangle$ と答えるべきであるというのである。懷疑論者は私が過去において私自身に与えた何らかの教示が $\langle 5 \rangle$ ではなく、 $\langle 125 \rangle$ という答えを正当化するのを疑っているのである。そのために彼は $\langle$ クワス $\rangle$ 関数を持ち出し、私の記号に関する用法の変化についての懷疑的仮定によって私の $\langle$ プラス $\rangle$ 関数による答えの正当化を懷疑するのである。彼は、私の過去の歴史に関する如何なる事実も一かつて私の心にあったものも、私の外的振る舞いも一私が $\langle$ クワス $\rangle$ ではなく、 $\langle$ プラス $\rangle$ を意味していたということを正当化しないと主張する。それゆえ、懷疑論者が持ち出した $\langle$ クワス $\rangle$ 関数からの答えも同じ理由から正当化されないのである。もしこのことが正しいとすれば、どちらの関数が私が意味していたかということについての如何なる事実もありえないことを意味する。そしてどちらの関数も過去において私が意味したという事実

がありえないとすれば、どちらの関数に関しても、私が意味していたという事実もありえないことになる（註7）。

懷疑論者の主張は、私の心の歴史における如何なるものも、あるいは私の過去の如何なる行動も一たとえ神を持ち出したとしても、 $\langle + \rangle$ によって、 $\langle \text{プラス} \rangle$ か $\langle \text{クワス} \rangle$ かを意味していたのかを確定するものは何もない、 $\langle \text{プラス} \rangle$ も $\langle \text{クワス} \rangle$ も両立するといふのであり、それゆえに、私が $\langle \text{プラス} \rangle$ を意味していたのか、 $\langle \text{クワス} \rangle$ を意味していたのかを確定することは不可能であり、私は $\langle 125 \rangle$ の問題に対して、ある特定の答えを出すさい、私はその答えを正当化できないということである。こうしたクリプキの導く、懷疑論的結論に対して、この議論は誤りであるという反論が当然にも提出されることを予想し、彼は反論者の立場を傾性論的見解 dispositional view と名付け、その見解を分析する。

傾性による分析

懷疑論者の見解に従えば、私に関する如何なる事実も私が $\langle + \rangle$ でもって $\langle \text{プラス} \rangle$ を意味していることを正当化しないというのであったが、それに対して、傾性論者は懷疑論者の主張は誤りであり、懷疑論者は、「そのような事実が実際に起こっている心の状態においてなければならない」という主張をする（註8）。傾性論者は、私が $\langle \text{クワス} \rangle$ ではなく、「 $\langle \text{プラス} \rangle$ を意味した」という事実は、実際に起こった心の状態ではなく、傾性的に分析されなければならない」（P 22）と主張する。傾性的に分析 dispositional analysis するとは、「 $\langle + \rangle$ によって加法を意味するというのは、 $\langle x + y \rangle$ の和を求められたとき、その答えとして x と y の和を与えるように傾性づけられているということである（特に $\langle 68 + 57 \rangle$ には、 $\langle 125 \rangle$ と答えるように傾性づけられているということである）」（P 22 - 23）。 $\langle \text{クワス} \rangle$ 計算法に関しても、同じく傾性づけられており、例えば、 $\langle 68 + 57 \rangle$ には $\langle 5 \rangle$ と答えるように傾性づけられているということである。過去における私の実際の思考や応答が、 $\langle \text{プラス} \rangle$ という仮定と $\langle \text{クワス} \rangle$ という仮定との区別を事実しないとしても、過去においてさえもこの二つの仮定を区別する傾性的事実が存在していたというのが傾性論者の主張である（註9）。

これに対して、懷疑論者の反論は、このような傾性論者の主張が懷疑論者を論駁したことにならないし、私が $\langle 125 \rangle$ という答えを選んだことを正当化しないということである。「私が $\langle \text{クワス} \rangle$ 計算法ではなく、加法を意味していたのであり、それだから、私の過去の傾性についての仮定 hypothesis によって、 $\langle 125 \rangle$ と答えるべきであるという私の現在の信念を私は正当化すると考えることにあるのであろうか。私の過去の全ての思考が、私は $\langle \text{プラス} \rangle$ を意味していたとも、 $\langle \text{クワス} \rangle$ を意味していたとも解釈が出来るときに、この種の特定の仮定が正しいと何故確信するのか。それとも、その仮説は私の現在の傾性

のみに関わることにあり、それゆえそれは定義によって正しい答えを与えることになるというのであろうか」(P 23)。懷疑論者に従えば、傾性論者の見解はただ単に傾性に従って遂行することと正しさが同じである。と言っているのにすぎないのであって、それは、ウィトゲンシュタインが「探究」の258節において、「私にとって正しいと思われることは何であれ、正しい」(258節)という想定に他ならず、その見解は「それはここでは正しさについて語るができないということのみを意味している」(同)。つまり傾性論者の説明は、過去の事実によって私の現在の応答を説明しているのであって、どの新しい事実においても私のなすべきことを私に指示すべきものを満たしていないのであり、したがって、ウィトゲンシュタインのが指摘しているように傾性論者は正しさについて語りえないのであり、彼の主張は過ちなのであるというのが懷疑論者の見解である。

傾性理論の誤謬

クリプキは傾性論者の過ちをさらに詳細に指摘する。そのなかから主なものと思われるものを挙げてみるとしよう。一つは、傾性理論は傾性に訴えることによって私の過去において実際にしたことが有限であるという問題を回避しようとしているということである(P 26)。二つには、私は傾性に訴えることによって正しい答えを得ると傾性論者は主張するが、私たちはともすれば誤りを犯す傾性を持っているということである(P 26)。三つには、傾性理論は、私の傾性の有限性及び誤謬の可能性を克服するために私自身を一種の機械とみなし、そしてその可能的な行為が機能を体現化している一種の機械とみなし、与えられた入力に対して正しい出力をメカニカルに導く傾性と想定することも可能である(P 33, P 35)と主張する。しかし、私の傾性を機械と見たたとしても、機械は有限な対象であり、また誤作動というのがあり、その意味では、機械の有限性ということと誤作動は、私の傾性の有限性と誤謬の可能性とに平行している(註10)。したがって、クリプキに従えば、どんな意味においても傾性による分析は懷疑的パラドックスを免れることができないのである。

傾性による分析は、既に示したように、懷疑論者が提出した主張に対して—〈クワス〉関数の問題にさいして、私が〈125〉ではなく、〈5〉と答えることにに対して—何らの正当化もしえなかったのである。クリプキは、ここでさらに仮に〈クワス〉関数のことを考えないで、〈プラス〉関数だけに限っても、傾性論者の主張には難点があることを指摘するのである。それは、〈68+57〉という問題に対して、これは加法を意味するという仮定とその問題に対する答えとの関係が何か、ということについての傾性論者の説明に向けられている。つまり傾性論者は、〈68+57〉の計算が加法を意味していたならば、私は〈125〉と答えるという説明を与える。しかし、クリプキに従えば、ここで要求されていることは、傾性論者のような記述的な答えではなく、「〈125〉と答えるべきこと」つまり規範的な答

えなのである。私がこの計算に関し、加法を意味し、それに一致するように私が意図する未来に対する関係は、記述的ではなく、規範的なのである。傾性論者は以上の分析が示すように、懐疑的問題の要点に対して、筋違いのアプローチをしているという結論をクリプキは導くのであった。それでは、ここでクリプキに従って、懐疑論の問題は一体何かが、尋ねなければならないであろう。

懐 疑 的 問 題

懐疑論者がここで論じていることは、私が意味していたものが〈プラス〉か〈クワス〉かということに関して、それを確定するものは存在しないということであった。ただ、懐疑論者は、私が〈プラス〉を意味していたという結論も〈クワス〉を意味していたという結論も共に両立すると主張するのであって、その意味では、この懐疑的問題は決して認識論的ではないのである (p 21, p 39)。繰り返すなら、懐疑論者の問題は、「私の過去の行動についての私の心の歴史における何物も—全知の神が知るようなことさえない—私が〈プラス〉を意味していたのか、〈クワス〉を意味していたのかを確定することができない」(p 21)ということにある。

私たちが〈プラス〉を意味しているのか、〈クワス〉を意味しているのかという事実直接影响到に接近しえないという考え方は、ともかくも奇妙であることは確かであろう。私は〈プラス〉を意味しているということを直接に、かなりの確実性を持って知っているのではないか、という反問が予期されよう。しかし、ここで問題にされていることは、もし私が過去に用いたのと同じ意味において用いようとするならば、私が現在意味していることに関する事実が私の未来の行為を正当化し、必然的にするような事実のことが想定されているということなのである。こうした事実は存在しない。何らかの言葉で何らかの意味をもつようなものが存在しえない。これまで議論が示しているように、〈68+57〉の問題が提出されたときに、私たちは〈プラス〉関数によっても、〈クワス〉関数によってでも答えを導くことができたのであった。このことは、私たちの現在の意図が私たちがしようとする如何なることとも一致するように解釈されうるということを意味する。それゆえに、そこでは一致も矛盾も存在しないことを意味する。

したがって、これまで議論されてきた問題は、ウィトゲンシュタインが「探究」の201節において述べている事柄、「私たちのパラドックスは、規則は如何なる行動の仕方をも決定できないということ、というのは、どのような行動の仕方も規則と一致させることができるということにあった。その答えが、どのような行動の仕方も規則と一致させることができるなら、そのときはまた矛盾もさせることもできる、ということであった。それゆえ、ここでは一致も矛盾も存在しないであろう」、ということの典型的な例証として提出されたものであった。

クリプキは、ウィトゲンシュタインが「探究」において、規則の問題に関して、このような懷疑論のパラドックスを提出することによって新しい形の懷疑論、つまりペーカーとハッカーの命名に従えば、〈規則—懷疑論 Rule-scepticism〉を展開したのであると主張するのである。彼は次のように述べている、「個人的に私はそれを（新しい形の懷疑論）、哲学がこれまでに見てきた最も徹底的で、独創的な懷疑の問題であり、極めて高次の例外的な才能の持ち主だけが生みだしうるようなものであるとみなしたいのである」（P 60）。

懷疑の問題の懷疑的解決(1)—ヒュームの懷疑論との関係

クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインは自分の懷疑の問題に対して、ヒューム型の懷疑的解決を与えたのであった（註11）。クリプキは、ウィトゲンシュタインの懷疑論とヒュームの懷疑論とに類似性を見て、「両者は、過去から未来へのある種の連関 nexus を疑問にすることに基づいて懷疑論のパラドックスを展開している。ウィトゲンシュタインは、過去の〈意図〉あるいは〈意味〉と現在のプラクシスとの間の関連を疑問にしている。例えば、〈プラス〉に関して、私の過去の〈意図〉と〈 $68+57=125$ 〉との間の関連を疑問にしている。ヒュームは、相互に関連した他の二つの連関を疑問にしている。過去の出来事が未来の出来事を必然とする因果的連関 causal nexus と過去から未来への帰納的、推論的連関である」（P 62（註12））。

ヒュームは、「人間知性論」において知性の働きに関しての懷疑論的な懷疑を展開して、その後それらの懷疑についての懷疑的解決を与えている。彼が与えた懷疑的解決とは、クリプキに従えば、提出された哲学的な懷疑の問題を詳細に吟味してみた結果、懷疑論には正当な根拠がないということが判明した場合に、懷疑の問題に対して直接に解決を与えるということにある（P 66（註13））。デカルトが彼の方法的懷疑に対して与えたのもこうした直接的な解決であった。ヒュームが懷疑の問題に対して与えた解決は、デカルトのようにア・プリオリな議論としてではなく、経験的な問題として、つまり私たちの習慣の問題として取り上げたのであった。クリプキは次のように述べる、「私たちの帰納的推論の源泉は、ア・プリオリな議論ではなく、習慣である。もしAとBとが、私たちが恒常的に接続するものとして見てきた二つのタイプの出来事であるとすれば、私たちは、Aというタイプの出来事が起これば、そのことによりBというタイプの出来事が予期されるように条件づけられている。特定の出来事aについて、それがほかの出来事bの原因となったと言うことは、それらの出来事が過去においてあった同様に私たちは未来においても恒常的に接続されると予期する、A及びBという二つのタイプの出来事として取り扱うことなのである。（二つの出来事が）必然的な結合であるという観念はこれらのタイプの出来事についての私たちの観念間の〈習慣的移行の感情 feeling of customary transition〉から生じるのである」（P 67（註14））。

クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインはこのようなヒュームの懐疑的解決を類比として、自らの問題の解決に証明を与えようとしたのであった。両者の関係を明らかにするために、彼はヒュームの因果論の関する帰結を〈私的因果性の不可能性 impossibility of private language〉(p 68)と呼び、私的因果性の不可能性に関して次のように述べる、
「素朴に、人は特定の出来事 a が他の特定の出来事 b の原因であるかどうかは、a 及び b という出来事のみを伴い、そして他の如何なる出来事も伴わない問題にすぎないと考えるかも知れない。ヒュームが正しいならば、それは違っている。たとえ神がその出来事を観るとしても、彼はある出来事が他の出来事に継起して起こるということ以外にそれらの出来事を関係づける何物も認めないことであろう。特定の出来事 a 及び b がそれぞれに対応するタイプの出来事、A、B に包摂されるときにのみ、その場合タイプ A の出来事の全てがタイプ B の出来事にという一般化によって関連づけられるのであるが、そのとき、a は b の原因であると言われうるのである。出来事 a と b とがそれ自体だけで考えられるならば、因果の概念は適用されない」(p 67-68)。

ここで述べられていることは、これらの出来事が規則性によって関係づけられているタイプの出来事の一事例として考えられる限り、それらは因果的に結合されると考えられるのであり、もし二つの出来事がそれぞれ独特のものであり、どちらのタイプにも包摂されうることが論理的に排除されているとすれば、これらの出来事に対して、因果の概念は適用されないということであり、それは私的因果性の不可能性の主張である。このヒュームの議論が、〈私的言語が不可能である〉というウィトゲンシュタインの議論と構造上似ている、というのがクリプキの主張である。

クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインにおける私的言語の不可能性は、ヒュームにおける私的因果性の不可能性と同様に、彼自身のパラドックスに関する懐疑的解決の必然的結果として帰結するのである。つまりウィトゲンシュタインは、規則に関する懐疑的パラドックスの議論を受け入れ、そしてそのパラドックスの出現を克服するために、ヒュームと類似の仕方では懐疑的解決を与えようとするのである。しかし、その解決にさいして、ウィトゲンシュタインは懐疑論者が気がつかなかったような隠された事実を、つまり私が〈プラス〉によって加法のことを意味しているということを構成するような世界における条件を指摘することによって、直接的な解決を与えるのではなく、そのような条件は、内的世界にも、外的世界にも存在しないということをまずもって承認するのである。そしてそのさいクリプキの見解に従えば、ウィトゲンシュタインは、ヒュームが懐疑論の問題を提出するさいに、全てのことを否定する懐疑論者の立場に立たず、常識の擁護に立ち、通常の信念を疑わなかったように、そのような事実が存在しない。と言っても、ウィトゲンシュタインは私たちがみな認めるようなものとか、私たちの信念とか、通常の言葉の用法の正当性をも否定するのではない。彼の否認は、そうした表現に対して哲学者たちが誤っ

て与えた事実についてなのである。

それゆえ、ウィトゲンシュタインは、例えば、「ジョーンズはかくかくの記号によって加法を意味していたという事実」(P69)という通常の文章の用法をも疑うのではない。彼の懷疑的解決は、「ある単独の個人が彼のみを孤立して考察し、彼がそもそも何かを意味していると語ることは許されないことを明らかにするのであるのであって、全ての言語が無意味であるというような全くの破壊的な結論を導くことにあるのではない」(P71)というのがクリプキの主張である。

懷疑的問題の懷疑的解決(2)—真理条件と言明可能性条件

懷疑的問題の懷疑的解決には、ウィトゲンシュタインの言語の問題の理解が必要とされる。ここで、まずクリプキに従って、ウィトゲンシュタインの「論考」から「探究」へ至るウィトゲンシュタインの言語に関する見解の変化を辿るとしよう(註15)。「論考」にみられる最も単純で、最も基本的な見解は、クリプキに従えば、真理条件 truth condition を言語理論の不可欠な要素とすることにある。「その見解は、平叙文はその意味を真理条件から、つまり、もしそれが真であるならば、成り立たなければならない事実への照合から得るということである。例えば、〈猫がマットの上にいる〉という文は、ある猫があるマットの上にいるとき、そしてそのときにのみ真であり、それ以外は偽である、ということを知ると言う人によって理解される。マットの上に猫がいるということが、もしそれが成り立つならば、その文を真とする事実、あるいは世界—内—条件 condition-in-the-world である」(P72)。

ところで、ウィトゲンシュタインは「探究」において、「論考」で提出した問い、つまり〈この文が真であるために何が成り立っていないからならぬのか〉という問いに代わって、次の二つの問いを問うというのがクリプキの見解である。「第一に、〈どのような条件のもとで言葉に関するこの形式は適切に言明(あるいは否定)されるのであろうか〉、第二に、この第一の問いが与えられたならば、〈これらの条件のもとで、言葉に関する形式を言明(あるいは否定)する私たちのプラクシスが私たちの生活における役割が何であり、その効用が何であるのか〉」(P73)。「探究」において真理条件ではなく、言明可能性条件 assertability condition あるいは、正当化条件 justification condition に基づいた言語像をウィトゲンシュタインが提出していると言うのである(P74(註16))。

真理条件ではなく、正当化条件に基づいた言語像を提出するということは、クリプキによれば「探究」において二重の役割が担われている。「第一に、それは、言語が如何なる意味をもつのかという問題に対して、「論考」のそれとは対照して、新しいアプローチをしている。しかし、第二に、私たちの言語の内にある言明としてみなされた意味そのものについての言明に説明を与えることができるのである。「ジョーンズは〈+〉によって加

法を意味している、というような言明には、如何なる事実も、如何なる真理条件も対応しない、というウィトゲンシュタインの懐疑論的結論を思い起こして欲しい。……ところで、私たちが事実、あるいは真理条件が有意味な言明にとって本質的であると想定するならば、誰かが何かを意味するという言明は（例えば、〈ジョーンズは〈+〉〉によって加法を意味している〉という言明）無意味であるということがその懐疑論的結論から導かれるであろう。他方、私たちが「探究」において示唆されているテストをそれらの言明に適用するならば、そのような結論には導かれない。ある人があることを意味している、という言明の主張を正当化することに必要とされる全てのことは、それらの言明が正当にも言明可能であるような特定可能な環境が大まかであっても存在し、そしてそのような条件のもとでそれらの言明がなされるゲームが私たちの生活において役割を担うことである。これらの言明に〈事実が対応する〉という想定は必要ではない」（註29）p 77. 78）。クリプキに従えば、懐疑論的パラドックスは「探究」の根本問題である。しかし、その問題の解決には、有意味な文は事実に対応していなければならないという前提を受け入れる限り、このパラドックスの解決の手立ては得られないのである（註17）。もし私たちが真理条件という枠組みの中で、こうした問題〔既に述べてきたように、〈ジョーンズは〈+〉〉によって加法を意味している〉、〈ジョーンズは〈+〉〉という記号をある仕方で使用しよう」と意図している〉という文に関して〕を取り扱うならば、〈意味している〉、〈意図している〉というようなことを取り扱う文はそれ自体無意味であるという懐疑論的結論に導かれるからである。クリプキは、ウィトゲンシュタインが「論考」において論じた言語の真理条件がそれ自体誤っていると指摘するのではなく、懐疑論的パラドックスの問題の取り組みには、真理条件を持ってしては解決されないと主張するのである。そして新たにここで論じられている問題の解決は言明がなされる正当化の条件を探り、私たちの生活の中でなされる言語ゲームの役割を探ることによって初めて可能となると主張しているのである。

懐疑的問題の懐疑的解決(3)―コミュニティ見解

クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインの懐疑的問題への解決は、〈かくかくのことを意味している〉とか、〈ある人の現在のある言葉の適用が彼が過去において意味していたことと一致している〉という言明を、ある状況においてなされる言語ゲームの私たちの生活においてはたす役割に見ており、そのような言明条件は、結局のところコミュニティへの言及に見ているのである。

ところで、懐疑論問題への懐疑的解決の核心は、クリプキに従えば、私たちが自分たちを正当化するような、理由もなしに躊躇なく盲目的に行為することにある。例えば、〈68+57〉という加法の問題に答えを求められた場合、私たちは何の躊躇なしに〈125〉と答え、〈クワス〉計算の規則が適切であったかも知れない、というような理論的可能性を考

えるというようなことなしに答えるし、また正当化なしに答える。なぜ〈125〉と答えるのかと問われるなら、その具体的な計算の仕方だけを答えるぐらいなものであろう。この計算の例は、正当化なしの、しかし不当ではない言語使用の事例であり、ほかに答える（例えば、〈5〉と答える）よりもこのように（例えば〈125〉）と答えるのが正しいのだ（正当化することなく）と確信に満ちた性向に従ってなされるのが言語ゲームなのである。クリプキの主張する〈言明可能性条件〉は、あれよりもこうするのが正しいという個人の確信という性向に従っているのである。個人は正当化なしに、彼の性向に確信を持って、計算という言語ゲームの規則に従っているのである。私たちは真理条件を持ち出しては、〈プラス〉計算であれ〈クワス〉計算であれ、正当化しえないので、このような形で個人の正しいという確信に基づくより、彼の行為を認めざるをえないのであろうか。もしそうだとすると、この議論は、まさしくウィトゲンシュタインが202節において語っている。「規則に従っていると思っていることは、規則に従っていることではない。それゆえ、人は〈私的〉に規則に従うことができない」。クリプキは個人を孤立して考える場合、人はこのような懷疑論的結論を免れることができないと指摘する。そこで、彼クリプキは、規則に従う者を独りだけ孤立した状態として取り扱うのではなく、彼をコミュニティとの相互活動をしているものとして考察するのである。

クリプキに従えば、個人がコミュニティにおいて相互活動の生活をしているならば、「他人はその人が従っている規則—正しいにせよ、誤っているにせよ—に帰することの正当化条件を持つのであり、そしてそれらの条件は、ただ単にその人自身の確信が無条件には受け入れられるべきであるということにはならないであろう」（P89）。子供が加法を学ばさいに、彼は教師から正しい答えを出すための諸条件を満たすように教育され、教師はまた自分が教えていると考えるのと同じ仕方で子供も加法の規則に適用しているという判断があって、始めて子供のやり方が正当化されるのである。したがって、「ジョーンズは〈プラス〉によって加法を意味している」という文についての言明可能性条件も同様な仕方で認められるとクリプキは主張する。彼は次のように述べる。「ジョーンズが、他人により訂正を受けるということに従うのであるが、〈私は〈プラス〉によって加法を意味している〉と仮に言う資格を持つのは、彼が新しい事例に対して〈正しい〉反応が出来て、〈今や私はやっていくことができる〉という確信の感情をいつも出来るときである」（P90）。クリプキは、まず言明可能性の正当化条件として、こうした〈正しい〉という反応及び〈分かった〉という心の性向を根源的なものとみなすのである。こうしたことを根源として、加法の規則をマスターした人は、十分に具体的な計算において他のコミュニティの人たちが与える答えと一致したとき（たまたま間違えることがあったとしても、他の人たちと同じやり方をしていると認められたとき）、始めてその人はコミュニティから加法の規則をマスターしたと判断されるというのである。そしてまた、その人は、その他の多くの

事柄においても、加法の規則と同じような形でテストを通過したとき、言語についての標準的な話し手としてコミュニティの生活及びコミュニケーションに参加していると判断されるというのである。

このようにして、クリプキは言明正当化条件を、まず規則の修得を通し、自らに〈そのようにやっていける〉という心の性向に基礎づけ、それをさらにコミュニティの反応にその確証を求めるのである。

クリプキは、ウィトゲンシュタインの言語像に従い、以上のことを明確化し、そしてそれをさらに正当化するために、ここで条件文の逆転 inversion という手法を用いる (註18)。それによれば、次のような条件文、「もしジョーンズが〈プラス〉によって加法を意味するならば、そのとき彼は〈68+57〉の答えを求められたならば、彼は〈125〉と答えるであろう」を逆転させ、「もしジョーンズが〈68+57〉の答えを求められ、〈125〉と答えないとすれば、そのとき彼は〈プラス〉によって加法を意味してはいない」という条件文に換える〔この条件文の逆転は対偶 contraposition と呼ばれ、論理的にはもとの文と等価であるが、前件と後件との優先順序を換えるのである〕。前者の条件文に関して、この文は、ジョーンズの中にある心の状態が成り立っていて、〈68+57〉のような特定の加法を行うことを保証する—これは懐疑論者がまさしく否定するものである—ことを明らかにするものとして述べられている。そしてその文の逆転つまり対偶の形の文では、後件の正当化条件が強調されている。その強調により、「もしジョーンズがあまりにも突飛な計算をするならば、彼が〈プラス〉によって加法を意味し、加法の規則に従っているとは考えられない」ということであり、このことは、私たちは本来「ジョーンズに加法の規則が与えられるなら、彼は〈クワス〉のような計算をしないということを期待しない」ということも意味している。このような逆転の手法により、コミュニティの成員について、彼がある概念ないし規則を把握しているということは、彼がコミュニティの言語ゲームに参加し、そのゲームを出来るということが期待されているということをクリプキは導いているのである。それゆえ、クリプキによれば、ウィトゲンシュタインの懐疑的パラドックスの解決が成り立つのは、コミュニティの言語ゲームに、その成員の一人として参加し、他の成員がするような行動に反応し、一致した行動をする限りなのである。

懐疑的問題の懐疑的解決(4)—言語ゲームの問題

クリプキは、言語ゲームの正当化の条件とそのゲームの私たちの生活における役割と有用性に関して、ウィトゲンシュタインの「探究」から、(1)、一致 Übereinstimmung, (2)、生活形式 Lebensform, (3)、基準 Kriterium という三つの概念を取りあげている (註19)。(1)、〈一致〉に関して、コミュニティの成員が、ある概念ないし規則に関して、一定の状況において、そのコミュニティの他の成員の行動と充分に一致する行動をする限り、彼

はその概念ないし規則を把握していると言われる。このようなコミュニティ内の成員間の相互の一致が言語ゲームにとって本質的とされる。成員間に一致が存在する限り、〈クワス〉ふうの行動は殆ど起こらず、加法の問題に関しては、どの成員も殆ど同じ方法で理解し、計算する。(2)、〈生活形式〉に関して、〈一致〉というとき、生活形式の共有とか一致が強調される。クリプキのウィトゲンシュタイン解釈によれば、「私たちは加法という概念及びその規則を皆同じ方法で把握しているのであるから、〈 $68+57$ 〉という問題に〈125〉と答える」とか、「私たちは加法という共通の概念とか規則を共有しているので、特定の加法の問題に共通の答えを共有する」という説明を与えることができない。この種の説明は、懷疑論的パラドックスとその解決に関するウィトゲンシュタインの論点を無視しているというのである。その理由は、既に述べてきたように、私たちの計算の結果を説明する—〈プラス〉によって加法を意味しているということを説明する—事実が存在しないからである。この〈一致〉の正当化は、「私たちが一般に一致するという〈ありのままの事実 brute fact〉によって支えられてなされている言語ゲームの果たす役割」からなされるのである〔と言っても、その概念を把握しているという事実を保証するものはないということとは変わらない〕。(3)、〈基準〉に関して、行動の一致とか生活形式の共有とに、ウィトゲンシュタインのパラドックスの解決が基づけられるというのであるが、そのことがどのようにして確認されるのであろうか、という問題に答えるのが〈基準〉の概念である。この〈基準〉という概念を解釈するにさいして、クリプキは、議論の呼んだウィトゲンシュタインの「〈内的過程〉は、外的過程を必要とする」(「探究」, 580節)という表現に対してこれまでの真理条件に基づく、検証主義や行動主義的解釈とは違った解釈を与えるのである。

クリプキは、ウィトゲンシュタインの基準の概念を二つのレベルにおいて考察している。一つは、最もプリミティブな、基本的な言語使用における言葉の使用の一致及びチェック可能性〔ある人が他人と同様に言葉を用いているのかどうかをテストすることが出来るということ〕に見ている。もう一つは、〈痛み〉という言葉のように、感覚を表す言葉の使用における一致及びチェック可能性に見ている。この二つの事柄に関して、クリプキに従って紹介するとしよう。まず、最初のものに関して、例えばある一定の状況において、その成員たちの間で〔例えば、子供と大人との間で〕言葉の使用が一致しているということ及びその使用の正しさが確かめられるということが〈基準〉ということである。子供のある言葉の発言、例えば、大人が見ている所でテーブルを前にして、〈テーブル〉という発言が大人の言葉の使用法と同じであるとき、子供はその言葉をマスターしていると言われ、そのとき大人は子供の発言の正しさを確認するのである。これが言葉の正しい使用のプリミティブな基準である。これに対して、感覚を表現する言葉の使用法に関する基準は、〈テーブル〉の問題ほど単純ではない。

例えば、子供が〈私は痛みを感じている〉という痛みの表出〔クリプキは、感覚を表す発話を〈テーブル〉というような、感覚を表出するのではない発話と区別し、表出(註20)の仕方を学び、そしてそれを適切な状況において発することができる場合、大人は子供がその表出をマスターしたと認め、その痛みの表出を正しいものと認める。この場合、先程の〈テーブル〉の場合とのアナロジーにおいて、一致及びチェック可能性という基準が考えられているように思われるが、しかし、〈痛み〉を表出する人の〈内的過程〉が問題になっているので、アナロジーは成立しないのである。〈痛み〉の表出の確認は、〈痛み〉を表出する人の行動〔その人の痛みの様々な振る舞い〕とそれを他人が観察できる状況が存在することによってなされる。したがって、ここでのクリプキの強調点は、ある人の〈痛み〉の表出を正しいとして認めるような、〈痛み〉に固有な行動と状況とが存在するという事実におかれる。その意味で、〈内的過程に関する外的な基準〉とは、〈痛み〉を表出する人の振る舞いが観察可能な状況にあり、他人がその表出に同意するものである。クリプキは、この外的基準による確認を真理条件としての検証主義とか行動主義とかの前提に従って解釈しない。外的基準とは、コミュニティにおける成員が、自らある規則に従っていると主張する場合、他の成員によって彼が規則に従っているのかどうかのチェックを受けるために要請されたものであると主張する。このことに関して、さらに正当化とか、その説明が要求されず、それは〈ありのままの事実〉としてただたんに存在するものである。クリプキによれば、このチェックが事実として存在する限り、「規則に従っているということと、従っていると思うこととは違っている」ということが生ずるパラドックスに解決が与えられるというのである。

懐疑的問題の解決と私的言語論

クリプキは以上のように、ウィトゲンシュタインの懐疑的問題の提出とその解決の問題を見て、そして彼自身が理解するウィトゲンシュタインの私的言語論を以下のように要約するのである(註21)。

(1) 私たちは皆、私が一度概念を〈把握〉すれば、その未来の全ての適用は決定されるように、私たちの言語が様々な概念を表現する—例えば、〈プラス〉、〈痛み〉あるいは〈赤〉—と考えている。事実は、そうではなく、ある時点で私の心にあったものは何であれ、私は未来においてそれを違ったように解釈することが自由である。例えば〈プラス〉を〈クワス〉として解釈することができる。また私は私の感覚に対して自分で命名できる。しかし、その命名によってその未来の適用を正当化するのではない。ウィトゲンシュタインが懐疑しているのは、ある概念の未来の用法は過去の私の心にあったものによって決定されるということである。この懐疑は、ヒュームの未来が過去によって因果的に、推論上決定されるということについての懐疑とアナロジーである。

(2)このパラドックスの解決は、例えば、〈私は〈プラス〉によって、〈クワス〉ではなく〈プラス〉を意味している〉というような私についての何らかの事実を見い出そうという企てを断念し、このような言明を私たちが実際にどのように用いているのかを定言的言明 (i) と仮言的言明 (ii) とに分けて、考察することに求められる。(i), 〈ある人がある規則に従っている〉(例えば、彼は〈プラス〉によって加法を意味している) という言明であり、(ii), 〈もし彼がかくかくの規則に従っているとすれば、その場合、彼はかくかくに行為しなければならない〉(例えば、もし彼が〈プラス〉で加法を意味しているならば、 $68+57$ に対する彼の答えは、 125 でなければならない) という言明である。懷疑論的パラドックスの解決には、これらの言明が主張される状況と私たちの生活におけるこれらの言明のはたす役割と効用を確かめなければならない。

(3)私たちはある個人をコミュニティから引き離し、孤立させて考察するとき、彼がしばしばある種の規則を把握したことを確信するような経験をもつ、これは傾性という観点から、その人が、例えばある加法の問題に反応するように決定されていると言えるが、このような傾性は、たとえ彼が実際に規則に従っていなくとも、あるいは間違っただけをしたとしても、生じえるのである。したがって、個人をコミュニティから引き離しては、(ii) で示した仮言的言明の適用の正当性は説明されないことになる。

(4)それに対して、その個人がコミュニティの成員であるとして考察するなら、事情が変わり、(i) 及び (ii) で示された言明の役割が明確になる。コミュニティは (ii) の言明、つまり条件文を受け入れるとき、コミュニティはそれを対偶の形式に変えて、受け入れる。つまり、〈ある個人がコミュニティが正しいとみなす特定の反応に応じないなら、コミュニティは彼が規則に従っていないと想定し、そして彼が十分にテストに反応すれば、コミュニティは彼を規則に従うものとして受け入れ、彼は他の成員たちとの間に相互に言語ゲームに従事できるものとみなされるのである。

(5)こうしたことは、〈私たちが皆同じ概念を把握しているという事実〉によって説明されるのではなく、私たちは実際に互の反応において一致しているということ以外にそれ以上説明されない〈ありのままの事実〉に基づいているのである。

(6) (ii) の仮言的言明つまり条件文が有意味であるためには、コミュニティは、ある個人が特定の状況において、ある種の規則に従っているのかどうかを、つまり彼の反応が他の成員たちの反応と一致するのかどうかを判断できるのでなければならない。

クリプキは、以上の(1)から(6)までの観点からウィトゲンシュタインの懷疑的問題の提起及びその解決の問題を把握するのである。そしてこの観点に立って、従来の私的言語論の解釈に異義を唱え、彼自身の解釈を与えるのである。

クリプキによれば、従来の解釈は、「探究」の243節に従ってなされ、「〈私的言語〉は通常、他人には理解することが論理的に不可能な言語であると定義されている。この意味

において、私的言語論は私的言語の可能性に反対する議論であると解されている」のである。この議論は誤ってはいないが、強調のされ方に問題があるというのがクリプキの私的言語論の要点である。この議論の擁護者は、規則に従うことを〈私的モデル〉に基づけるような私的言語を否認することにあるが、そのさい、彼らは規則に従っている人に関する概念は、規則に従っている人その人のみについての事実によって分析されるべきであり、彼がコミュニティの成員であることに言及する必要がないと考えている。つまり私的言語の不可能性は、私的言語における規則に従うことが私的モデルのみによって分析されるのであるから、言語や規則にとって私的モデルが正しくないということから導かれているというのである。

これに対して、クリプキはコミュニティから孤立した島で生活しているロビンソンクルーソーを引合に出して、「それでは、彼が何をしようとも、彼が何らの規則にも従えない」ということを意味するのかという問題を提起する。クリプキは、クルーソーが規則に従っていると考えるなら、彼を私たちのコミュニティに受け入れ、規則に従うという私たちの基準を彼に適用していることを意味する。物理的にコミュニティから孤立している人に関して、彼は規則に従うことができるが、コミュニティから孤立させられて考察されている人は規則に従うことができないとクリプキは主張する。私たちのコミュニティが、ある人について彼が規則に従っていると言うのは、コミュニティが彼に課すテストに彼がパスするとき、彼が規則に従っているときなのである。

最後に、クリプキは真理条件の理論と言明条件の理論を区別し、ウィットゲンシュタインが規則に従うということに関して、言明条件の理論を主張していると強調する。新しい加法の計算問題に対して、あの答えではなく、この答えが正しいのだということに関しての真理条件理論—必要にして十分条件—は「探究」にはないというのがクリプキの主張である。真理条件理論とは、「コトバは、世界—内—事実 a fact-in-the-world に対応による真理条件によって意味が与えられる」ということを主張する理論である。もっと具体的に言えば、「どの m , n に対しても、私たちが〈プラス〉によって意味する関数の値は、〈定義〉によって言語的コミュニティの答えとして与える値である」(p111) という理論である。ウィットゲンシュタインの見解は、まさしくこうした真理条件理論の否定にあったのであり、それ代わって言明条件理論を展開しているとクリプキは主張する。言明条件理論は、大まかに言えば、「私が、'W'によってWを意味するということの言明条件は、私が'W'をかくかくに適用する傾向があり、コミュニティの他の成員も、またそのようにする」ということを主張する。つまり、それは、既に私たちが取り扱ってきた言語ゲームの正当化の条件とそのゲームの私たちの生活における有用性に関する〈一致〉、〈生活形式〉、〈基準〉の条件を満たす言明条件に言及している。ウィットゲンシュタインの有意義な言明条件についての主張は、私たちの生活における言明の、あるいは答えの役割と効用

に求められ、したがって、ウィトゲンシュタインの言明条件の見解は、真理条件理論によるような、定義によって正しい答えを求めるというのではなく、コミュニティの成員が一致するという〈ありのままの事実 brute fact〉に基づけられていることだけで、十分なので、それ以上の正当化を必要としないというのがクリプキがウィトゲンシュタインから導いた結論であった。そしてこの結論にクリプキはウィトゲンシュタインの懐疑的問題の懐疑的解決を見たのであった。それゆえ、202節は「探究」の中心問題であり、そこに私的言語論の結論が述べられているというのがクリプキの解釈である。

II ベーカーとハッカーのクリプキ議論の批判

ウィトゲンシュタインの懐疑論に関する見解

ベーカーとハッカーは、彼らの共著、「懐疑論、規則、言語」において、クリプキ議論を徹底的に批判する。彼らによると、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈は、全くの誤解であり、ウィトゲンシュタインが決して主張したことのない多くの見解をウィトゲンシュタインの見解として提出しており、したがって、彼らは、クリプキが詳細に展開する議論は不条理であると断定する。ベーカーとハッカーは、クリプキが「探究」の134-243節が20世紀において書かれた最も独創的で、最も有意義な哲学的省察を含んでいると考える点では、正しいと評価するのであるが、しかし、彼らは、真の私的言語論が243節以下の節にあるのではなく、143-242節にあり、その結論が202節に述べられているというクリプキの解釈をナンセンスだとするのである。そして彼らのクリプキ批判は、とりわけウィトゲンシュタインの根本的立場が懐疑論にあるというクリプキの解釈に向けられている(註1)。

ベーカーとハッカーは、規則-懐疑論は現代に特徴的な現代の哲学的及び文化的環境を背景にして提出された議論であり、この議論の提出のされ方が非常な注意を喚起し、深遠であるようにおもわれているが、しかし、規則-懐疑論は現代に特徴的である誤解に深く根差した、皮相的なものの顕示でしかなく、規則-懐疑論は決して深遠な問題などではなく、端的に幻影である、ということを主張する。そしてこの規則-懐疑論は、決してウィトゲンシュタインの「探究」に基礎づけられているのではないし、ウィトゲンシュタインが主張しようとしているものでもない、彼らのクリプキ批判の要点は、クリプキの解釈が何よりもまずウィトゲンシュタインに根差していない、ということにある。その第一の問題として、ウィトゲンシュタインは、懐疑論に対して関心をもってはいたが、クリプキが主張するように懐疑論を彼の哲学の中心問題だとは考えていなかったし、彼の著述からクリプキの主張を擁護できるものを見出しえないということである。

ベーカーとハッカーは、ウィトゲンシュタインの著述から、次の二つの文章を引用する。「懐疑論は、問いが不可能のところで疑おうとするなら、それは、論駁しえないのではなく、明らかに無意味なのである。というのは、疑いが存立しうるのは、問いが存立する限りであり、問いが存立しうるのは、答えが存立する限りであり、そして答えが存立しえるのは何かを語ることが語られうる限りであるからである」(註2) 草稿ノート、1915. 5. 1)、「奇妙なことは、誰かが〈馬鹿げている〉と言い、自分が拠って立っている基盤を疑わせる企てを退けるとすれば、それは全く正しいと私は考える。そのさい、彼が〈私は

知っている」というコトバを用いて、自分を擁護しようとするなら、彼は間違っている、と私は受け取る」(註3) 確實性, 498)。

この二つの文章は、ウィトゲンシュタインの最も初期と最晩年の著述からの引用であり、ベーカーとハッカーは、これらの二つの文章を引用することによって、ウィトゲンシュタインが彼の哲学的思索の生涯にわたって懷疑論をナンセンスだと受け取っていたのであり、それゆえ、クリプキの解釈のように、自分の哲学的問題の中心部分が懷疑の問題であると知らされるなら、それこそ驚くに違いないと厳しく批判するのである(P 5)。彼らに従えば、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈はウィトゲンシュタインの本来の哲学的立場を理解せず、誤解に基づいてなされている。クリプキは「探究」の中心問題に懷疑の問題の提出にみているが、その場合、クリプキはウィトゲンシュタインの懷疑論とヒュームの懷疑論とのアナロジーを求めている。しかし、彼らの主張に従えば、クリプキにおける懷疑論者はヒュームのような古典的懷疑論者とは異なり、自らを否定する概念的ニヒリズム conceptual nihilism を主張しているのである(P 6)。

ベーカーとハッカーは従えば、クリプキの概念的ニヒリズムは、彼のヒュームの古典的懷疑論及びウィトゲンシュタイン誤解から導かれていのである。ヒュームの懷疑論は、私たちは主観的経験についての陳述が真である、ということを知っているということには同意するが、しかし、その陳述が客観についての陳述を含まないので、私たちは物質の世界について何かを本当に知っている、ということを否定しているのである。さらに、心の問題に限定するなら、その懷疑論は、他人の行動についての知識の可能性(あるいは記憶及び現在の証拠についての知識、単称命題についての知識の可能性)を受け入れるが、その知識が他人の心についての認識を確証すること(過去の帰納的一般化)を否定しているのである。クリプキが問題としている事柄にそくして述べるなら、ヒュームの懷疑論者は'W'によってWを意味しているということを実に知っているのであるが(註4)、他人が受け入れている認識を確証しえないと言っている。それに対して、クリプキの懷疑論者は'W'によってWを現在知っているものが、過去に彼が意味していたものと同じであるかどうかを全く確信できないと主張する。それゆえ、クリプキの懷疑論者は、意味が存在せず、言語は不可能であるという結論に導く。ベーカーとハッカーにとって、これこそ不条理な結論であり、したがって、これは懷疑論ではなく、自分が座っている枝を切り落としている概念的ニヒリズムとしか言えないものである。

さらに、クリプキは、クリプキのウィトゲンシュタインが常識的な哲学者であり、彼は全ての人が認めていることのみを述べている(P 63)。そしてその限り、ウィトゲンシュタインはヒュームと類似しており、それゆえ、ウィトゲンシュタインの懷疑的問題の懷疑的解決は、ヒュームの常識的信念に従って正当化されると主張する[その場合の正当化というのは、既に述べたように真理条件の理論によるのではなく、言明条件の理論によっ

てである」。しかし、このクリプキの主張もまたヒュームの誤解に基づいている。第一に、ヒュームは、「自我、客観性、因果性の分析において、常識を擁護しているのではない。彼は、哲学は日常的信念が理性的な正当性を有するという点に関して決して疑いをはさまないと言っているのではなく、哲学は日常的信念を変えるのには無力であると言っている」(P 7)。そして「〈常識〉を擁護するどころか、彼は全ての議論は懐疑論者の側に立っている。理性的な探究は、〈常識〉についての基本的信念が虚構であり、それは精神の連合の自然法則に従った想像力の働きによって生み出されたものであるということを証明している」(P 7-8)。第二に、ヒュームの懐疑的解決は日常的信念を正当化するためになされたのではない。ヒュームは、理論とプラクシスとの間の、理性と自然との間の根本的な裂け目を擁護したのである。彼は、懐疑的議論が信念及びアタラクシア *ataraxia* の懐疑に導くというピロン主義者の主張を否定したのであった。つまり、ヒュームは「信念は理性によってではなく、自然によって決定される」(同上)と主張し、「実際私たちの信念を覆そうとはしたのではなく、それらの信念は、理性とは違って自然によって、非理性的に、因果的に決定される、ということを示そうとしたのであった」(同上)。第三に、クリプキは、ヒュームばかりではなく、ウィトゲンシュタインを誤解している。ウィトゲンシュタインの目的は、常識的信念の表現に用いられている常識的概念の探究にあった。しかし、彼はそれらの信念の擁護に関わったのではなく、それらの概念を明瞭化に関わったのである。「というのは、哲学の問題は、日常概念の歪曲と誤用から生じ、正気に戻ることは、問題となっている表現についての展望をえることにあるからである」(P 9)。第四に、クリプキに従えば、ウィトゲンシュタインは、「私が〈プラス〉か、〈クワス〉を意味していたという如何なる事実も存在しない」と主張するのであるが、しかし、このことは全く誤りである。ペーカーとハッカーに従えば、ウィトゲンシュタインは、A がかくかくのことを意味していたら、A はかくかくのことを意味していたということが事実であると述べているのである。しかし、ウィトゲンシュタインが否定しているのは次の主張である。つまり、私がかくかくのことを意味しているということは、世界一内一事実 *a fact-in-the-world* であるという主張であり、また、私が〈プラス〉によって加法を意味していたということを私が正当化するのは、私が私の心においてこの事実を観察したという主張である。以上の諸観点から、彼らは、ウィトゲンシュタインが懐疑的問題及びヒューム的な懐疑的解決を哲学的洞察の根本だとみなしていたとは考えられないと結論する (P 10)。

パラドックスの問題—その考証

クリプキにとって、「探究」の201-202節はその書全体の核心問題であった。201節はそのパラドックスの問題を提出し、202節は私的言語論の結論を述べている。クリプキがどのような見解から主張しているのかについては既に詳しくみてきたので、ここで、ペーカ

ーとハッカーに従って、「探究」に関する史料という観点から、201-202節が果たして「探究」の中心的問題であったのかどうかを吟味するでしょう（註5）。

ベーカーとハッカーの「探究」成立の過程の考証によれば、「探究」の第一部は、1938年（T S 220）、1942-3年（T S 239）、1954年1月（〈中間版〉）、1945-6年（T S 227）の四つのタイプ草稿の段階を経て最終版となった（註11）P 11）。〈中間版〉は1-217節まで最終版と殆んど同じではあるが、しかし、それには201-203節が含まれていない。さらに、〈中間版〉は私的言語論を多く含んでいる。したがって、当然にもクリプキが「探究」の中心部分であり、私的言語論の結論であると主張する、201-3節が省かれているというのは奇妙なこととなる。

201-203節がでてくるのは、MS 129 [MS 180 (a) の手帳に含まれている] においてであって（註6）、「規則はどんな行為も決定しない、なぜならどんなものも規則と一致させられうるからであるという難問に彼は（以前に）立たされていた」と述べる文章で始まるのであるが、彼はその後の文章を消し、その代わりに、「これは私たちのパラドックスであった」という文章を入れている。ここでは、彼は「（以前に）難問であった」と述べているのは、この201節の問題が198節と同じ問題であり、198節の結論がこの節まで持ち越されていることを意味する。198節は、規則の表現と規則と一致しているとみなされる行為との間の結合がトレーニングによる慣用によってなされると述べている。つまり規則に従うことは一つの習慣であり、かくかくに反応してこのように行為することが正しく、その他の場合は間違っている、というように私たちは教えられる。私たちはこのことを規則に照らし合わせて説明し、正当化する。したがって、「規則が規則に従って何をするのかを決定することができないという以前の難問つまりパラドックスは誤解ということになる。このことは規則の適用に対する如何なる解釈も、如何なる規則も私たちを満足させることができないし、それ自体一致しているとみなされるものを定義によって決定することができないという事実によって示される。というのは、一つ一つの解釈は、それが如何に適用されるのかという同じ問題を生むからである」（P 13）。

MS 129において、ウィトゲンシュタインは198節の議論に新たな要点を付け加え、規則に従っているとみなされるものは、規範的な規則性によって決定されると主張している。〈規則が人を導くことができない〉ということは、人が規則を如何に理解するのかは、解釈ではなく、規則に従っている行為において示されているということである。この草稿の201節は最終版と同じになっている。つまり、私たちがある仕方で規則を理解するということは、その適用において確実に示されているとウィトゲンシュタインが述べている。MS 129における201節の草稿の後に、「私はそれが赤であると見るが、しかし、それが何と呼ばれるのか知らない！私はそれがこの色であると見る、そして私はこの色がかくかくと呼ばれることを知っている。どの色か。それはこの色であると私は認める。しかし、いま

私はコトバ、あるいは行為に移らなければならない」。この草稿の後で、ウィトゲンシュタインは、「ここで規則は私たちが窮地に追込んでいる。というのは、これはこれであるということを見ることから、それは赤であることへの移行は存在しないので、ここでは規則の適用は存在しないからである。〈規則〉は自由に浮いている。というのは、この（見掛けの）移行は私的なものであるからである。もし対象を見ることから〈赤〉というコトバを適用することへの移行が仲介（認知の過程とか、私的な直示的定義によって）なしにはなされえないなら、そのときその移行は規則によってもなされえない。したがって、〈規則に従うこと〉は、ある見掛けのプラクシスによっては代わることのできないプラクシスというものが意図されている」（P15）。これは、202-3節において、「〈規則に従うこと〉は一つのプラクシスである」の理解に資するものである。ウィトゲンシュタインの主張は、「〈これはかくかくであると見る〉ことから、〈これは赤である〉ということ移行を導く規則は存在しない」ということであり、その理由は、「そのような規則の適用のための技術が存在しえないし、その適用における規範的な規則性も、同じ仕方でも常にコトバを適用する習慣もプラクシスも存在しえない」ということである。見ることと言うこととの間を仲介する認知作用を前提するような私的規則に従うことは偽謬であり、規則に従うことと従うと思うこととは、その場合区別されず、無意味となる、という議論をウィトゲンシュタインはそこでしているのである。

以上の考証から、ペーカーとハッカーは次のような結論に導く。

1, 201-3節の成立過程の考証は、これらの節で言われていることが「探究」の中心問題ではないことを示唆している。中間版にはそれらが入っていないが、そこには、201-3節に先立つ議論と多くの私的言語の議論が完全な形で含まれている。2, そのオリジナルなコンテキストでは、それらの議論は198節及び私的言語の議論によって確立された私的な直示的定義の無意味さに基づいて、組み立てられていることは明白である。3, それらの節のオリジナルな目的は、198節の洞察を深め、そして言うことと見ることとの間を仲介するものとしての認知に関する誤謬を確認するにある。つまり、規則に従うようなものは存在しないという新しいパラドックスを擁護することではない。4, 草稿のコンテキストは、どんな形であれ懐疑論との関わりを一切持たない。また、懐疑の問題とか懐疑的解決にも関わりを持たないのである。5, そのオリジナルなコンテキストでは、規則に従うということが一つのプラクシスであるという発言は、直接に社会的なプラクシスとは何ら関わりを持たない。その専らの関心は、規則に従うことは一つの活動、つまり規則の把握を示す行為に関する規範的な規則性であり、人が如何にして規則を理解するのかを明らかにしている。このように、ペーカーとハッカーは四点にわたってクリプキの議論の批判点となる事実を枚挙するのである。ただし、彼らはそれを決定的だとは断言しないで、ただ以上のように示唆されるということを強調しているのである（P15-16）。

201—3 節の解釈

彼らに従えば、201節の(a)は、198節において提出された問題に関わる、つまり、「規則は、この点で私が何をすべきかをどのように私に教えることができるのであろうか。私は何をしようとも、何らの解釈をとおしてそれは規則に一致している」(198節)という問題に関わる。ここで提出されている問題は、139—242節をとおして取り扱われている問題と密接に関わっている。「問題設定のコンテキストは次のようである。以前には、ウィトゲンシュタインは、表現の意味はその用法にあると論じたのであった。ここでも等しく、表現の意味は意味の説明によって与えられているものである(75節)。そして意味の説明は表現の用法の為の規則である。しかし、そのような説明、例えば直示的定義とか一連の例示とか一般的定式は、如何にして表現の複雑な用法を決定できるのであろうか。というのは、どの規則も種々に解釈されうるからである」、「説明の相関者である理解に関しては、……私たちは、私たちが説明を与えることによって何を理解するのか言うことができる。しかし、直ちに理解され、把握されたものが、表現の適用のパターンである用法のようなものに如何にしてなりうるのであろうか、そして理解されたものが、ある説明によって、つまり規則によって表現されるとすれば、様々になされうるその説明は、人がある表現を如何にして用いるのかということにおいて、どのように人を導くのであろうか」(P17)。彼らに従えば、143—242節はこうした問題を巡って論議されており、その議論は主として理解の概念と規則に従う行為の概念との二つに分けられている。〈理解〉に関して、143—184節において論じられ、〈理解〉は精神的な出来事、状態、過程ではなく、一つの能力と同種であると論じられる。〈規則に従う行為〉に関しては、185—242節において論じられており、そこでは、コトバの用法にとって何が正しく、あることが何を意味しているのか、ある表現を理解することはどういうことかが明らかにされる(註7)。

ベーカーとハッカーによれば、〈理解〉にせよ〈行為〉にせよ、如何にして規則との一致が決定されるのかという問題に取り組むに当たって、ウィトゲンシュタインは198節の冒頭に書いているような多様な解釈があるということに直面した。つまり「どのようなことをしようとも、解釈によっては規則と一致できるので、規則は一体どのようにして人を導くことができるのか」という問題に直面したのであった。この問題は201節の最初の部分と同じ問題である。「どんなことをしようとも、解釈によって規則と一致させることができる。それゆえに、規則は私たちを導くことができないと言ってはならない。そういうことは馬鹿げたことである。むしろ、どの解釈も解釈されることと共に空中にひっかかっていて、後者を支えるのに役立たない。解釈それ自体では意味を決定できない」(193節)ということである。したがって、彼らに従えば、ウィトゲンシュタインの与えた答えは以下のようなものである、「規則が適用されるコンテキストにおいてのみ解釈を与えることの問題が生じるのである。というのは、コンテキストにおいてのみ規則が用いられるのであり、

そして行為と規則との間の内的関係が確立されるからである。そしてそれは習慣の存在によって、つまり規則の表現の規則的な使用によって確立される」(P18-19)。

さらに、199-200節は、規範的な行動がコンテキストにおいてその行動のポイントや目的についてははっきりとした規則性を示す多様な機会を必要とするということを強調していると彼らは受け取る。201節は規則を理解することに関して重要な問題を提起している。つまり、そこでは「規則の理解は、解釈にあるのではなく、規則の適用の事例に依拠して、私たちが〈規則に従う〉とか〈それに逆らう〉と呼ぶものに示される」(P19参照)。理解とは技術の修得であり、規則の理解は実際の適用における技術の行使に示されているというのである。ウィトゲンシュタインは、201節においてパラドックスを受け入れ、それに懐疑的解決を与えているのではなく、「パラドックスがパラドックスなのは、欠陥のある状況においてだけなのであり、もしこのことが矯正されるなら、パラドックスはなくなるであろう」(「数学の基礎」, P410)と述べている。201節において拒否しているのは、規則が行為を導く(あるいは、私たちは、ある表現についての私たちの用法がその意味と一致することを知っているということ、あるいは私たちは実際に表現をその用法の適用との一致において適用しているということ)というような当たり前のことではなく、それは、ある解釈を与えられることによって始めて、規則は規則と一致する行為が決定するという考え方に対してなのである。

202節に関して、202節の最初の部分は、ベーカーとハッカーによれば、201節の最後の部分の繰り返しに過ぎない、つまり、私がある規則を如何に理解するかは、究極に解釈によって示されるのではない。私たちが〈規則に従う〉と呼んでいるものに、つまり規則を適用するさいに、私がするものに示されるのであり、それゆえ、202節の「規則に従うということは、一つのプラクシスである」ということが導かれる。しかし、クリプキのように〈プラクシス〉を社会的なプラクシスと解釈することは誤解である。ウィトゲンシュタインの主張の要点は、「言語が必然的にコミュニティを伴うということではなく、〈コトバが行為である〉ということを確認することにある」(P20)、「しかし、プラクシスは単なる行為ではなく、規則と一致した規則的な行為である。〈どんな種類のものであれ、一度しか起こらないようなものではない〉」(「数学の基礎」P335)。無論、私たちは社会的存在として行為するのであるから、規則に従う行為は当然に社会的なプラクシスではある。しかし、この場合の議論の要点は、こういった事実を確認することにあるのではない。規則に従う行為は、それゆえに言語というものは、一種の習慣的な行為であり、思考の形式ではなく、行為の形式であるということを確認することにある。そして202節において、ウィトゲンシュタインはまだ私的に規則に従うことはどういうことであるのかについて説明していない。私的に規則に従うことへの言及は、後の私的言語の議論でなされているのであって、したがって、この節での〈私的に規則に従うことができない〉という表現が、

クリプキの言うように、私的言語論の結論であるとは判断されがたい。

私的言語論の検討

クリプキによれば、138-242節は、懷疑的問題とその解決を取り扱っている。243節以下の節は（一般的に私的言語論と呼ばれている）、138-242節において引き出されてた言語についての一般的な結論を感覚の問題に適用しているのであり、202節は規則に関しての懷疑的結論及び私的規則の拒否から私的言語の不可能性を結論している。この場合の彼の議論は、ウィトゲンシュタインの「数学の基礎」において示されている次の言葉に基づいている。「+2の数列を続けるのにさいして、私は‘20004, 20008’ではなく‘20004, 20006’と書かなければならないということをして知ることができるのであろうか。（その問題は、‘この色が〈赤〉であるのを私はどのようにして知るのがか’という問題と似ている）」（「数学の基礎」1, 3節,）。クリプキは、ここからウィトゲンシュタインが感覚の問題と数学的省察との結合を考えていると主張する。そして彼はウィトゲンシュタインが数学の哲学と私的言語論〔それは感覚言語の問題である〕とは根底において同一であり、それが彼のパラドックスから由来していることを例証しているものと受け取っているのである（p79）。

ペーカーとハッカーによれば、クリプキの243節以下に関する解釈は不当な解釈である。というのは、一見、私的言語の議論は、〈感覚の問題〉と同じ問題のように見えるが、しかし、実際は違っている。この議論は、精神的なもの、内的なもの、主観的なものの非優位性を確立することに関わっているのであり、ウィトゲンシュタインはデカルト以来のヨーロッパ哲学の主流の根底となっている精神的なものの優位、つまり観念論及び独我論の拒否に関わっている、というのである（註8）p23の脚註参照のこと）。私的言語の議論は、規則に従うことの議論とか、直示的定義、意味、理解あるいは説明の議論に基づいて構築されている。しかし、そのことが私的言語の議論そのものではないことは言うまでもないであろう。

クリプキが「数学の基礎」を引き合いにして、規則に従うことの問題と私的言語の議論との間の結合を指摘するのであるが、それは誤解である。無論、クリプキの言うように数学の哲学の問題と心の哲学の問題との間には、深い類縁性があることは否定しえない。しかし、クリプキが引用する文章からはその類縁性を指摘することができないのである。ここでは、〈+2〉の系列を続けていくことと〈赤〉という述語を適用することとの間の結合があるが、私的言語の関心は、客観的な叙述にあるのではなく、主観的な叙述にある。ウィトゲンシュタインは、「この色が〈赤〉であるということを私はどのようにして知るのがか」という問題は、数学の問題と似ているが、「この経験が〈赤を見ている〉ことである、ということを私はどのようにして知るのがか」という問題とは似ているとは述べていな

い。これらの問題は大変異なった問題であり、最初の二つ問題は規則を基盤としておるが、私的言語の議論は、「私は痛みを感じている」とか、「私は赤を見ている」という事態に焦点が向けられている。そしてそこでの問題は、直示的定義とその用法とか適用との間を橋渡しするものはないが、私的な規則、つまり私的な直示的定義があるのかどうかを議論している。したがって、ウィトゲンシュタインの「数学の基礎」の議論は、私的言語の議論ではなく、規則の議論、規則に従うことの議論、その適用の議論である。その議論は数学の哲学つまり数学的必然性、数学の証明の問題、数学と論理学との関係の問題に証明を与えるためになされているのである。私的言語の議論にとって、問題になっているのは、「私的なものの見本が、コトバに意味を与え、精神的なパラダイムが自分自身に対する規定とか、説明において、正しい用法の規範を構成するように、用いられるのかどうかということなのである」(p23)。

したがって、私的言語の議論の結論が、クリプキの主張のように243節以前で議論され、証明されているとは解釈されえないという見解をベーカーとハッカーは主張するのである。

クリプキの懐疑的問題

クリプキは、'W'についての私の理解が、すなわち'W'によってWを意味するものが、'W'をWに適用することの正しさを決定するということを私はどのようにして知るかという懐疑的問題を取り上げた。クリプキの懐疑論者は、私が過去において与えたなどの教示もこうした答えを強要したり、正当化することを疑う。このようにして、クリプキは、ウィトゲンシュタインのどのような意味において規則がその適用を決定するのかという問題から、私の過去と現在との意図との間の関係の問題へ、つまり〈プラス〉によって私が加法を意味しているという問題へ移行する。この移行は自然な信念から奇妙な信念への移行である。例えば、〈赤〉とか〈プラス〉が与えられると、〈これ赤である〉、〈 $68+57=125$ 〉と言うのは、ごく自然なことである。しかし、クリプキの主張は、私たちはこのような言明を確証する事実を与えることができないということである。

ベーカーとハッカーは、こうしたクリプキの懐疑的問題の提出がウィトゲンシュタイン議論の誤解に基づいていると受け取り、それを次のように指摘する。

1、ウィトゲンシュタインに従えば、「私は、私が……のことを意味している」というのは、私はかくかくのことを意味しているということを強調する仕方が、ナンセンスかのどちらかである。「私が、'W'によってWを意味する」ということと「私は、私が'W'によってWを意味していることを知っている」ということとの間には、区別はない。したがって、ここでは、「かなりの確実性をもって知ること」とか、「直接に知ること」ということが問題なのではない。また、私が〈プラス〉によって加法を意味していたという私の確信は何らかの証拠に基づいているのでもない。

2, ウィトゲンシュタインに従えば、意味と意図は決して経験ではない。ここでウィトゲンシュタインが関わっていることは、私たちがこれやあれやのことを意味しているとか、意図しているということを言うのような私たちの権利についての懷疑ではなく、哲学的混乱を根絶することにある。

3, 内観 introspection は事実問題として理解の如何なる原初的狀態が存在しないということを示している、とはウィトゲンシュタインは論じてはいない。彼が論じているのは、クリプキが言っているような仕方ではなく、'W'によってWを意味している狀態が存在するということが論理的に不可能であるということなのである。ウィトゲンシュタインに従えば、人が〈プラス〉によって加法を意味しないとか、人がまじめになって〈チェス〉をしようと言うとき、チェスをする意図がないというようなことにはならない。ウィトゲンシュタインにとって、理解、意味そして意図は、何らかの狀態ではない。

4, 仮に、意味がある狀態であったとしても、そのことがウィトゲンシュタインの問題を解くことにはならない。何らかの狀態が、規則とその適用との間のギャップ、つまり、論理的なギャップを橋渡しすることはできない。ある意味の狀態が、このような規則の適用を正しいとか、それ以外にはそうではないということの特徴づけるわけではない。

ウィトゲンシュタインが、「私は〈プラス〉によって加法を意味している」と確信をもって言うのは、私が意味についての私の内的狀態を内観的に意識しているからではない。「私は〈プラス〉によって加法を意味している（例えば、〈クワス〉計算法ではなく）」ということを確認しているからである。

クリプキの真理条件の議論の誤解

以上のような、ウィトゲンシュタインの議論に対して、クリプキは、〈プラス〉によって加法を意味するような狀態は存在しないということを主張することによって、そこから直接的に懷疑論的議論を展開するのである。クリプキのこの議論は、そもそも真理条件理論についての誤解に基づいている。

クリプキの懷疑論者に従えば、「私の過去の歴史についての如何なる事実も一かつて私の心においてであっても、私の外的な行動においてであっても何ものも一私が〈クワス〉でなく、〈プラス〉を意味していたということを確定しない」、そしてまた内観の議論においても、「私が〈プラス〉を意味していたということを構成する私についての事実が存在しない、ということになるようにおもわれる」（P13, 21）。クリプキにとって、この〈事実〉ということは決定的な意味をもつ。というのは、クリプキにとって、「探究」の1節から133節までのウィトゲンシュタインの目的は、「論考」において提出した意味の真理条件理論に基づいて議論を展開することにある。つまり、その理論に従えば、ある命題を真だとするものは、世界における事実であるということである（それゆえ、ここで問題にな

っている議論も、それとの相関において取り扱われている)。「私が‘W’によってWを意味する」ということを真とするのは、「私の一心における一事実」ということになる。しかし、こうした私の意味を構成する世界一内一事實は存在しないとクリプキはクリプキの懐疑論者とともに主張する。それゆえに、この懐疑的問題の解決には、真理条件理論が拒否されなければならないと主張するのである。この主張は、ベーカーとハッカーに従えば、ウィトゲンシュタインの誤解に基づく外的外れの議論である (P 31-32)。

1, 私が昨日‘W’によってWを意味していたという事実は、昨日一世界一内に一存在した一事実 a fact-that-was-in-the-world-yesterday ではない。そして私が現在‘W’によってWを意味しているという事実は、私の一心の一現在の一事実 a fact-in-my-mind-now ではない。しかし、私が過去‘W’によってWを意味していたとすれば、そのとき私がそのように意味していたというのは事実であり、そしてもし私が現在‘W’によってWを意味しているとすれば、そのとき私がそのように意味しているのが事実である。彼らはこの主張を次の例から導いている。「オックスフォードが英国にあるのは事実である。しかし、その事実は英国にあるものでも、他の何処かの空間にあるものでもない。またその事実は時間的な存在物でもない」(P 31 (註9))。

2, したがって、「私が〈プラス〉によって意味していたということを構成する私についての事実は、私がそのように意味していたとという事実なのである」。

3, 私が‘W’によってWを意味していると私が言うとき、私は、このことを「世界一内一事実 facts-in-the-world」とは切り離して言っているのではない。しかし、クリプキは、ウィトゲンシュタインが懐疑的解決に対して、とった唯一の方法は、私が意味していることを私が確信をもって言うのは、私が意味していることを世界一内一事実から離れて、私が言っていることから導かれなければならないということであると述べている。このことはウィトゲンシュタインがまさしく否定していることである。ウィトゲンシュタインにとって、世界一内一事実についての像は混乱しているのであって、その混乱を如何にして取りはらい、整序するかが問題である。したがって、この問題の解決は、私がコトバによって意味したものに関して何らかの事実が存在するということを否定することにあるのではない (P 31)。

4, クリプキが主張するように、意味の真理条件理論の拒否は「探究」の1節から133節までが鍵問題であり、そしてパラドックスの解決に決定的であるとすれば、ウィトゲンシュタインはその書全体において事実についての議論を全くしていないということになる。しかしながら、彼は事実に関して直接的に取り組んでおり、それが「哲学的文法」にはっきりと述べられている (註10)。ただ、それは「探究」には組み入れられてはいないが、それでも彼は、P という命題を真とするのはP という事実であるということをそこでも否定してはいない (P 31-32)。

クリプキの懷疑的解決の誤解—言明条件の理論

クリプキの懷疑論的パラドックスの議論は最初伝統的懷疑論の方法と平行しているのであるが、しかし、この議論は意味が存在するということを否定し、私たちをパラドックスに直面させ、言語は不可能であるという概念的ニヒリズムに導いている。クリプキが主張するウィトゲンシュタインの解決は言明条件によって意味の真理条件理論を拒否することにある。そして既に詳細に述べたように、言明条件の理論をもちだすことによって直面させられた懷疑的パラドックスを否定し、そしてそのことによって懷疑的問題に対する懷疑的解決が見だされると主張する。しかし、このクリプキの議論にウィトゲンシュタインの議論との類似性を見出すのはきわめて困難である。そればかりではなく、クリプキの議論それ自体が立論の説得力に欠けている。

ベーカーとハッカーは、クリプキ議論の難点をさらに次の点に見ている。まず、クリプキは「〈ジョーンズに〈プラス〉で加法のことを意味しているのか〉と尋ねるとき、〈その通り、〈68+57〉の答えは何かという問いに答えるのに確信があるので、私は自分のすることを知っている〉とジョーンズは答える」と述べ、懷疑的解決にさいして、クリプキは「確信もって、かくかくに答える。」という個人の性向に言明の正当化を求めている。これに対する二人の批判は「確信があるということによって‘W’によってWだ、と言う資格があるとか、かくかくに答える性向があるということによって答えが正しいとされたり、‘W’によってWを意味しているということが正当化されるのではない」(p34)ということにある。

私が‘W’によってWを意味してるということを主張するとき、そこで問題になっているのは、私が以前にそれによって意味していたものとの一致に主張しているかどうかの問題なのではない。「私が‘W’によって何を意味しているのか」、「私がこのコトバを実際に理解しているのかどうか」等が問題となっているのである。したがって、こうした問いに対して、私の確信を強調することによって答えるのではなく、私が‘W’によって意味していることを説明することなのである。例えば、「〈独身者〉は結婚していない男である」、「〈赤〉はこの（例えば、熟したトマトを示して）色である」、「〈プラス〉は、例えば、2と3が変数の値であったとき、その値が5となる関数のことを意味する」等と説明することなのである。

さらに、クリプキの三人称に対する言明条件は次のようになされている。「私たちはスミスに、「ジョーンズは〈プラス〉によって加法を意味するのか」と尋ねる。彼は「そうだ、a プラス b（a と b とがどんな値であれ）の答えを求められたとき、彼はいつも私が与えたのと同じ答えを与える」と答える。それに対して、ベーカーとハッカーは、クリプキのこのような問題提出を批判し、次のように言う。

(1)こうした問いにさいし、ジョーンズがスミスと同じ答えを与えるのかどうかは問題外

である。正しい答えを与えることができるのかどうかである (P 35)。(2)また、クリプキの分析によれば、スミスはジョーンズが‘W’を理解していると判断できるのは、(a)ジョーンズが新しい事例に対して‘W’を如何に適用するのかをスミスが知る場合であり、(b)彼が‘W’の適用を正しいと受け取るが単にそれが彼自身与える性向がある故であるという場合である。そしてクリプキに従えば、「Aが‘W’によってWを意味する」ということの意味は、その言明条件によって与えられる。と言っても、「Aが‘W’によってWを意味する」ということは、他のものが知るということの意味するものであるということにあるのではない。〈意味〉に関しての正しい使用に対する基準が準備されていなければならないとベーカーとハッカーは主張する。それゆえ、クリプキは自ら提出した言明条件によって、彼が問題とした懐疑的問題に解決を与えていないと彼らは主張するのである (P 35)。

クリプキの懐疑的問題は、私たちの現在の用法が過去の用法と一致していることを告げることができるような事実が過去および現在にも存在しえないということにあった。しかし、私たちは皆、かくかくしかじかの言葉を適用するさいに、共通な性向を分かち合うならば、そのとき、私たちは皆‘W’によってWを意味するのであり、つまり、その場合個人は‘W’をコミュニティの他の成員たちが適用する性向とは違ったようには適用しないことを〈ありのままの事実〉として受け入れており、彼は他の人も‘W’によってWを意味しているものとして、つまり他の人も‘W’によってWを意味する規則に従うものとして受け入れているというのがクリプキの主張であった。ここにクリプキは懐疑的問題の懐疑的解決を求めたのであった。しかし、彼らの疑問はこうした言明条件理論によって懐疑的解決がなされたのであろうかということである。クリプキの〈68+57〉の問題のように、それまで誰もしたことの無い問題が与えられた場合、〈125〉と答える私たちの現在のコミュニティの成員の性向が、私たちが前もって〈プラス〉によって意味していたものと一致しているということを私たちはどのようにして知るのか、というのが彼らの疑問である。つまり、この計算問題がかつて過去において誰もしたことがないのであり、それまでコミュニティの成員の誰もその問題に答える性向を経験していないのであり、私たちが意味しているのは、〈プラス〉なのか〈クワス〉なのかを満たす言明条件は昨日存在しなかったのである。それにもかかわらず、コミュニティの成員たちは、〈125〉という答えにどのようにして一致するのかという疑問を彼らは提出するのである。

ロビンソン・クルーソーの問題

彼らに従えば、クリプキの言明条件の理論は、私たちの生活における言明の役割と効用とを強調する点で、ウィトゲンシュタインの議論に従っていると言えるが、しかし、このクリプキの主張には既にみたような難点が指摘されるのである。その意味では、言明条件

の理論は、ウィトゲンシュタイン議論の全体を包括するものではなく、一部しか説明していないのである。そしてクリプキの主張はコミュニティの強調であるがゆえに、その言明条件はコミュニティから孤立した人間には適用されないことになる。

これに関するペーカーとハッカーの解釈は次のようである。もしある人間が孤立させられると、規則に従うという概念は如何なる実体的な内容をもちえない。というのも、彼を規則に従っているとみなす限り、つまり単なる自分の傾向だとみなす限り、規則に従っていることと従っていると思うこととの間には区別がない。したがって、この議論は、202節により243節以下で展開される私的言語の議論と矛盾するとして、排除されるからである。しかし、クリプキに従えば、孤島のロビンソン・クルーソーはこの事例に該当しない。もし私たちがクルーソーを規則に従うものと考えれば、私たちはクルーソーを私たちのコミュニティに連れてきて、彼に規則に従うことの基準を適用することである。クリプキは、物理的に孤立された個人が規則に従わないと言うには及ばないが、孤立において考えられた個人は規則に従うとは言われないと主張している(註11)。この主張に対して、ペーカーとハッカーとの批判は次の通りである。

ここで、まず問題とされなければならないことは、規則に従うと言うことが何を意味するかということである。もしクリプキの言うように、規則に従うという私たちの基準をクルーソーに適用するということの意味するならば、例えば、私たちが猫が鼠をとっていると言うとき、私たちは〈とっている〉という私たちの基準を猫に適用している。そのさい、私たちは猫を私たちのコミュニティに連れてくるのであろうか。そうすることは、この場合の要点ではないと反論されるのかもしれない。しかし、クリプキにとって、クルーソーを私たちのコミュニティに連れてくることは、彼が規則に従っている(ただし、彼が規則に従うという言明条件を満たす限りにおいて)と私たちが判断する事実にあるのであるし、以上のことは、Aがコミュニティの他の成員のように、その規則を適用し('W'を用いる)、そしてAの反応と性向が他の成員と一致するなら、Aは'W'によってWを意味しているということを規定しているのである。しかし、ペーカーとハッカーは、ここでクルーソーの規則は私たちコミュニティの規則と同じでなければならないのかと問う。彼は新しい規則を作りだしたり、新しいゲームをすることができないのであろうか。私たちは彼の規則や、ゲームを理解するためには、クルーソーの実際的な行動に彼が規則に従っているとみなすのが何であり、その確証を求めなければならない。しかし、この場合の確証の仕方は、クルーソーを私たちのコミュニティに連れてきて、彼が私たちの規則に従っているかどうかをチェックするのとは同じではない。このときの判断は、私たちのコミュニティでなされている規則に従うということの判断とは別である。この点に関して、クリプキは考慮してはいない。

ウィトゲンシュタインは、MS 124においてクルーソーのことを取り扱っている。それ

は「探究」の243節（そこでは、「自分自身に対して、勇気づけたり、命令したり、語ったり、答えたりする等」の人間のことに触れている）の初期の草稿であり、そこでは、クルーソーが自分自身で言語ゲームができるものとして言及されている（MS, p 211と221）。誰か観察者がいて、クルーソーの言葉を、つまり彼の私的言語の意味を、彼の行動に示されることから学ぶことができるということが述べられている（註12）。したがって、クルーソーを私たちのコミュニティに連れてきて、彼の反応が私たちの反応と一致するのかとか、あるいは私たちの規則に一致しているかどうかについてウィトゲンシュタインが述べていることを示唆するものはなにもないということである。ペーカーとハッカーに従えば、ウィトゲンシュタインは、クルーソーが規則に従っているかどうかの基準は、彼の行動に示されると述べているのである。

クリプキ議論のウィトゲンシュタイン誤解—三つ診断

ペーカーとハッカーはクリプキのウィトゲンシュタイン議論が誤解において基づいているということを次の三点において指摘する。

(i) クリプキは懐疑的問題の設定にあたり、〈一致〉の概念にその議論を基づけているが、ウィトゲンシュタインの関心とは核心において異なっている。クリプキは過去の用法と現在の用法との一致に焦点を求めることによって、理解の問題と現在の用法の正しさの問題とを一緒にしてしまい、そして彼はコミュニティにその保証を求めることによって、問題を混乱させている。ウィトゲンシュタインは理解をある表現の使用及びその意味の説明とに関連づけている。両者には相関関係があるが、それとクリプキのように一緒にすることとは区別されなければならないというのがウィトゲンシュタインの強調である。意味は理解の相関者であるので、あるコトバの意味はその用法及びその意味の説明とに結びつけられている。コトバの意味はその意味の説明によって説明されるものであり、それはまたコトバが発話において用いられる仕方でもある。コトバの意味を理解することは、一つ能力と同種であり、それは規則に従ってシンボルを用いる技術の修得である。理解の基準は行動にあり、その説明と一致した表現の用法、つまり規則にあり、そしてその意味の正しい説明を与えることにある。このことにより、クリプキが示唆しているような判断における一致ばかりではなく、また定義における一致も意味及び理解にとって本質的なものである。しかし、クリプキの議論はこうした要件を満たしているのかどうかは不確かである。

クリプキは、ウィトゲンシュタインに従って「真理は、大抵の人々が真である、と主張することとは同じではない」（p 111）と主張している。ウィトゲンシュタインは、ある新しい加法の問題に対する答えが他の答えよりも正しいという、正しさの必要にして十分な条件である真理条件を持っていないとクリプキは主張する。クリプキに従えば、ウィトゲ

ンシュタインの言明条件は、加法の問題に対する正しい答えは、全ての人が与えるものではなく、もし全ての人がある答えに一致を与えるなら、誰もその答えを誤ったものとは呼ぶことを正当であると感じないということである。この主張は、ペーカーとハッカーに従えば、「探究」の著者とは異なって、論理学を排除していることを意味する（P43-44）。

（ii）クリプキが指摘するように、〈一致〉の役割はウィトゲンシュタイン議論において重要な役割を持っている。しかし、彼はその働きを歪めている。既に指摘してきたように、彼は判断における一致、定義における一致との関係に関しては何も触れてはいない。それは、クリプキが〈一致〉ということで〈W'によってWを意味するもの〉を考えており、そしてコミュニティにおける成員間の一致を念頭においているからであると言えよう。しかし、クリプキの言うコミュニティとの一致という意味の言明条件はウィトゲンシュタインの見解なのかどうか問われなければならない。

ウィトゲンシュタインにとって、〈一致〉は言語ゲームの存立にとって、枠組みの条件なのであって、言語ゲームの構成体なのではない。それゆえ、〈一致〉は、Aが〈プラス〉とか、〈赤〉とかを理解しているかどうかの基準ではない。それは、むしろAがその表現の意味を正しく説明し、それを正しく用いるということなのである。言語ゲームには、〈一致〉が前提とされるが、個人の正しいとする性向と他の成員との性向の一致ではない。教師が子供を教えるのは、他人が持つと同じ性向を持たせるということにあるのではなく、正しく規則に従わせることにある。学習者は正しい用法の基準として規則を用いることを、つまり意味の説明を学ばなければならない。したがって、「正しいとみなされるものは、私たちが与える性向のあることの反応ではない」、「私たちは正しきの尺度として規則の規則的な用法のコンテキストにおいて、はじめて規則との一致について語るができる」（P46）。

（iii）クリプキの主張は、後期ウィトゲンシュタインが真理条件にではなく、言明条件あるいは、正当化の条件に基づく言語の像を提出しているということであった。それは、ある種の文に関して、特に心理学的特性とか能力を扱う三人称の文では、私たちはそれらの言明を正当化する状況がどんなものであるか、ということによってその果たす意味を説明するという点では正しい。しかし、どの文の意味もこのようにして与えられる、ということウィトゲンシュタインの見解だ、とするのは、根拠のないことだし、非合理である。確かにクリプキも非—叙述文とか感覚の表出は、言明条件に当てはまらないと述べてはいるが、しかし、こうした例外が問題なのではない。「歯痛、痛みだけがこの言明条件に当てはまらないのではなく、私がかくかくすることを意図するとか、あれこれのことを記憶するとか、かくかくのことを欲すると言うことも同じく当てはまらないのである。また、当てはまらないのは、一人称の心理学的叙述ばかりではなく、〈バラは赤い〉、〈テーブルは赤い〉、〈今日は暖かい〉、〈私の名前はN。Nである〉などの日常的発話も同じく当て

はまらない。ウィトゲンシュタインは私たちがそれらの言明条件を与えることによって、それらの発話の意味を説明するということを文一般に関して当てはまると言っているのではない。文がどのように用いられているのかということを観察することは、全ての文が言明条件を有しているということを暗黙に主張しているのではない」(P49)。

それゆえ、ウィトゲンシュタインが意味の言明条件を新たに考案したということは、全く誤っているとベーカーとハッカーは主張する。ウィトゲンシュタインは、言語は文と語に意味を与える真理条件とか、言明条件とかでもって成り立っている首尾一貫した体系であると主張しているのではない。言語は、ウィトゲンシュタインにとって古典的論理学においても、直観主義の論理学においても規則の計算なのではない。言語は言語ゲームの一つの集合体であり、どのレベルにおいても私たちの生活に織り込まれた人間の諸活動の無限に多様化した形式なのである (P49)。

クリプキのウィトゲンシュタイン議論の全体的な批判

以上のように、私たちはベーカーとハッカーに従って、クリプキのウィトゲンシュタイン議論について辿り、クリプキの議論の難点の詳細に見てきた。彼らの主張は、執拗にまでクリプキの議論がウィトゲンシュタイン誤解に基づいていることを指摘し、ウィトゲンシュタインがそもそも懐疑的問題を提出しているのではないし、それゆえ、懐疑的解決を図っているのでもないことを証明しようと議論を重ねている。しかし、こうした彼らの反論は、実はウィトゲンシュタインの議論、とりわけ、規則に従うということと私的言語の議論からは導きだされないということに向けられているのである。したがって、クリプキの提出する懐疑論の問題を軽視し、クリプキ議論の重要性を否定しているのではない。彼らは今日の状況で、懐疑論の問題は極めて重要であり、私たちがこの問題に取り組む必要性を強調しているのである。そのためにも、ウィトゲンシュタインの規則に従うこと及び私的言語の議論に適切な説明を与えることの必要性を強調する。その意味で、クリプキの議論は多くのウィトゲンシュタイン誤解に基づいているのではあるが、それを刺激として、私たちがウィトゲンシュタインの「探究」の中心問題の何かを改めて問うべきであることを彼らは提案している。

註 及 び 関 連 文 献

この小論は、クリプキのウィトゲンシュタイン議論の解釈を直接的なテーマとしているので、小論作成にあたり、クリプキからの引用は、クリプキの著述 *Wittgenstein on rules and private language*, Harvard University Press, 1982 の頁付けを直接本文に添えた。また、ウィトゲンシュタインの「哲学探究」からの引用は慣例に従い、パラグラフナンバーを表示し、例えば 202 節というようにして本文に添えた。その他のウィトゲンシュタインの著述からの引用は書名を添え、同じく慣例に従って表示した。さらに、二章で取り扱ったペーカーとハッカーの著述、*Scepticism, Rules & Language*, Basil Blackwell, 1984 からの引用もクリプキの場合と同じ取り扱いとした。ところで、註をつけるにあたり、一章と二章とに分け、それぞれに番号をつけた。

序及び一章の註

註 1 前述の書であり、この書はもともと、Irving Block (ed.), *Perspectives on Philosophy of Wittgenstein*, Basil Blackwell, Oxford, 1982 に掲載されたものである。邦訳として、黒崎宏、「ウィトゲンシュタインのパラドックス—規則、私的言語・他人の心—」, 産業図書, 1984年がある。

註 2 既に述べたように、「哲学探究」からの引用は本文中に、例えば 202 節というように記入した。

註 3 この懷疑論をペーカーとハッカーに従い規則—懷疑論 Rule-scepticism と呼び、古典的懷疑論と区別するために用いた。クリプキ自身の命名ではない。

註 4 クリプキ、前述書、p 3. 小論の本来の関心はクリプキの言うように、ウィトゲンシュタインの「探究」を永遠の弁証法として書かれていると受け取り、クリプキが自らのように対話しているのかを探るための指針としてのクリプキの議論に向けられている。

註 5 クリプキ議論の批判として、Roger Scruton, *Critical Notice*, *Mind* vol. XCIII, 1984. C. Wright (ed.), *Essays on Wittgenstein's Later Philosophy*, Synthese, vol. 58, no. 3, 1984 があり、後者には、S. Blackburn, *The individual Strike Back, Wittgenstein on Meaning, Interpretation and rules*, Peacocke, *Colour Concepts and Colour Experience*, C. Wright, *Second Thoughts about Criteria*, G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *On Misunderstanding Wittgenstein* などが掲載されている。そのうち、ペーカーとハッカーの論文は、「懷疑論、規則、言語」*Scepticism, Rules & Language*, Basil Blackwell, 1984 に組み入れられている。

註 6 クリプキは、ここで二つの関数、〈プラス〉関数 plus function と〈クワス〉関数 quus function とを取り上げる。〈クワス〉関数というのは、クリプキが考案した関数であり、本文に書かれているように、変数 x と y について、 $x, y > 57$ の場合、 $x \oplus y = 5$ であると定義することによって、成り立つ奇妙な計算法である。ここでは、この計算を私たちが通常行っている加法の計算 addition とは区別し、quaddition にクワス計算法という訳語を当てた。

註 7 クリプキは、ウィトゲンシュタインの数学の哲学と心の哲学との間に、同一の基本的考察を含んでいるものと見なしている。小論では、簡略のために数学の事例のみを引き合いにして、クリプキの議論を紹介しているが、クリプキは色などの感覚を表現する語〈グルー grue〉をも引き合いに出している。〈グルー〉とは、〈グリーン green〉と〈ブルー blue〉との合成語である。この〈グルー〉という語は、数学の事例の〈クワス〉という語

に対応し、〈グリーン〉という語は〈プラス〉という語に対応するものとして用いられている。そして〈ブルー〉という語に定義を与えることによって、〈ブルー〉という語の使用が〈クワス〉計算のときと同様に可能であると主張することによって、クリプキは数学の哲学と心の哲学とが基本的に同一の考察を含んでいると考えている。つまり、〈グリーン〉という語の使用を巡った問題は〈プラス〉という語に関する場合と同じ手続きで懐疑にさらされている。

註8 傾性という語は *disposition* の訳語であるが、クリプキはこの語を G. Ryle の *The Concept of Mind* に求めている。p22 参照。クリプキはウィトゲンシュタインがしばしば傾性的分析をしているものと解釈されるが、基本的にはウィトゲンシュタインは如何なる傾性的分析の立場に立たないことを強調する。クリプキは Russell の *The Analysis of Mind* に心に関しての傾性的分析を見出し、ウィトゲンシュタインもこの書の影響を受けていることを認めるのである。クリプキは、ウィトゲンシュタインが Russell の影響により行動主義的見解及び傾性論的見解に共感しているが、半面、それらに反対の立場を取っていると指摘し、特に Russell の *theory of desire* に関しては、ウィトゲンシュタインは拒否していることを強調している。p25 参照。

註9 クリップキは、傾性論者の見解を検討するにあたって、傾性論者の言う、傾性的分析を簡潔に次のように要約している。「それは、二項の関数記号〈f〉によって、どのような数論的関数 ϕ を私が意味しているのかを私に告げる基準を与えるのである。つまり 〈f (m, n)〉について、その場合、〈m〉、〈n〉は特定の数 m, n を表す数であるが、その関数について私が問われたとき、 ϕ (m, n) を表している数〈p〉と答えるように私が傾性づけられているなら、〈f〉はその二項関数 ϕ を表している。この基準は、与えられた関数によって私がどのような関数を意味しているのかを私の傾性から読み取ることが私たちにできるということを言っている」(p26)。したがって、前述の〈プラス〉計算にせよ、〈クワス〉計算にせよ、この定義の特殊な事例にすぎないことになる。

註10 クリップキはウィトゲンシュタインの「探究」の193-5節における機械に関する議論と及び「数学の基礎」1部、118-30、112部、48-9節の議論から、傾性的分析と機械の使用についてのクリプキの批判が示唆されたことを強調している。p35 参照。

註11 クリップキはウィトゲンシュタインの懐疑的問題と Quine と Goodman の仕事とに付きながりを見ている。Quine については、彼が、*Word and Object* 1において、翻訳の不確定性の問題と指示対象の詮索不可能性について問題にし、私たちが意味している事柄に関して、何らかの客観的な事実が存在するかどうかを問うている。Quine はそこで人々との一致を強調し、内的観念とか、意味が私たちの言語的行動を導くという拒否をしているが、この二つの点に関して、クリプキは Quine とウィトゲンシュタインとの見解に同質的なものを見ている。しかし、Quine の議論は行動主義の立場に立っており、言語の問題を行動主義的心理学という枠組みの中で扱っているのが、意味の問題を行動への傾性として扱っている。つまり、Quine は論点を傾性的に定式化している。この点、ウィトゲンシュタインとは異なる。また Goodman については、彼の著述、*Fact, Fiction and Forecast* において、彼は「帰納に関する新しい謎」を取り扱っており、その議論の展開がウィトゲンシュタインの懐疑的問題の議論に極めて近く、確かに Quine もウィトゲンシュタインと同様に意味に関する懐疑に関わっているが、それよりも Goodman の議論はウィトゲンシュタインの議論の展開に近いとクリプキは強調している。註7において〈ブルー〉について取り扱ったが、クリプキの〈クワス〉関数導入は Goodman のこの〈ブルー〉の議論にされている。その意味で、〈ブルー〉の議論は〈クワス〉の議論と対応している。しかし、Goodman の問題は、「過去においてブルーであった草が何故未来においてブルーであることを予測しないのか」ということであり、ウィトゲンシュタインの問題は、「過去

において私が〈グリーン〉によってブルーを意味していなかったのに、現在草ではなく、空を〈グリーン〉と呼ぶべきであると一体誰が言うのであろうか」ということであり、Goodman は帰納の問題に集中し、意味の問題を無視している。ウィトゲンシュタインにとって、問題なのは意味の問題である。

註12 クリプキは、ウィトゲンシュタインの問題をヒュームの懷疑論とに類似性を見い出しているが、これまでに曖昧にされてきた理由を幾つか挙げている。1. 両者の問題は類似はしているが、明確に全く別なものである。2. ウィトゲンシュタインはヒュームに関心も共感も示していない。彼はヒュームのものを読むのに苦痛を感じていた。3. ヒュームは心の状態に関してある観念を第一源泉とするが、それはウィトゲンシュタインが最も攻撃しようとしていたものである。4. ヒュームは自ら懷疑論者であると告白しているが、ウィトゲンシュタインはそのようなことは決して告白したことはない。ウィトゲンシュタインは実際しばしば〈常識〉の哲学者とみなされ、私たちの日常的な考えを擁護し、伝統的な哲学の問題を解消しようとしたとみなされている。クリプキはこのようにウィトゲンシュタインとヒュームとの類似性がこれまでかえりみられなかった理由を枚挙している。そして彼はこれらの両者間の相違を誇張することを戒め、両者の類似性を探るのである。その一つとして、ヒュームも日常的信念を疑ってはならないという性向を持っていたことを挙げている。

註13 D. Hume, *A Treatise of Human Nature* (L. A. Selby-Bigge (ed.), Clarend Press, Oxford, 1888), Book 1, Part IV, Section 1, p183 からの引用。

註14 Hume, *ibid.*, Book 1, Part IV, Section II, p187。

註15 クリプキは懷疑的問題の解決にあたり、ウィトゲンシュタインの言語哲学の「論考」から「探究」への変化について触れている。「論考」におけるウィトゲンシュタインの自然言語 natural language の位置づけについて、クリプキは Donald Davidson の自然言語に関する理論と共有する特徴を指摘している。つまり、次の諸点において、Davidson の見解は「論考」のものと共通であると指摘している。(i), 真理条件が言語の理論における鍵となる要素であること。(ii), 言語の隠されている深層構造の被いをとることが的確な解釈に関する理論にとって決定的に重要であること。(iii), 深層構造の形式が予め理論的、準一理論的な考慮によって束縛されていること。(iv), その束縛は、深層構造が記号論理学の形式的言語の論理的形式と近い論理的形式を持っているということを示している。(v), 文が論理的操作による〈原子的命題〉からつくりあげられていること。(vi), 自然言語の深層構造が外延的であること。

そしてクリプキはここで挙げた特徴は全て「探究」において、論駁されていると主張する (p71-2n)。また、クリプキは Dummett に従って [Dummett, *Wittgenstein's Philosophy of Mathematics*], 「探究」は意味を説明する一般的形式が真理条件の叙述であるという「論考」の見解の暗黙の拒否であると主張する (p73)。

註16 正当化条件と言明可能性条件という言葉のニュアンスの相違をクリプキは指摘する。クリプキによれば、前者は後者ほど直接法の優位性を示唆していない。

註17 クリプキの見解に従えば、ウィトゲンシュタインは「探究」の1節から137節までで、「論考」の言語理論を拒否するために議論を展開し、それに代わる新しい言語像をおおまかに描いているのである。そのうえに立って、138節から242節までにおいて懷疑的問題およびその解決の問題を取り扱っているが、それ以前の節で論じられていることはこれらの節で展開される問題の予期をも含んでおり、その意味では、138節から242節における議論はそれ以前の諸節の議論に依拠していると言うのである。

註18 条件文の逆転というやり方は、優位性を強調するためである。例えば、William James の「私たちは泣くがゆえに、悲しみを感ずるのであり、悲しいがゆえに、泣くのではない」

(「心理学の原理」)とか、あるいは、「私たちはある種の行為を不道徳であるゆえに非難するのではない、非難するゆえに不道徳なのである」、「矛盾律を必然的に真であるゆえに、受け入れるのではなく、私たちが受け入れるゆえに必然的に真なのである」(ヒューム)などを挙げ、クリプキは優先順を逆にする効果をもたらすものとしてこの方法を取っている。p93。

註19 以下(1)から(3)までは、p96-9までの要約である。クリプキは(1)に関して、「探究」の219, 231, 238, 240節を引き合いに出して論じている。(2)に関して、「探究」のp223, p226を引き合いにして論じている。(3)に関して、「探究」の580節の議論を取り上げているが、クリプキは基準をウィットゲンシュタインの心の哲学において基本的な役割を演じているものと受け取り、ここで述べられている〈外的基準〉を行動主義的、検証主義的前提として受け取ることを拒否している。

註20 ここでクリプキの区別に従うなら、avowal という語は感覚の自然な表現、例えば痛みの一種の振る舞いとしての表現ではなく、一人称の「私は痛い」という言語的表現を伴う発話である。クリプキはこの語が本来率直な告白という意味を持つものとして、一人称の言明に適用している。ここでは、〈表出〉という訳語をあてた。表出という語にクリプキが表現しようとしている上述の意味を込めてである。

註21 クリップキは感覚言語の問題を論じ、そしてそれを数学の場合との比較を試みている。それから私的言語に関する議論を以下小論で要約しているように論じている。p107-109。

二章の註

註1 本章はペーカーとハッカーの「懐疑論、規則、言語」(前述)の議論に基づいて構成したものである。彼らの狙いは、第一義的にはオースドックスなウィットゲンシュタイン解釈の復権にあるが、クリプキ議論に見られるように、規則についての懐疑論が現代の哲学的、文化的状況を背景として主張されている〔例えば、Goodman の〈新しい帰納法の謎〉は、規則懐疑論の一つの典型である〕ことに対して、その懐疑論の主張を論駁することが目論まれている。

註2 Wittgenstein, *Notebooks 1914-16*, Basil Blackwell, Oxford, 1961, p44.

註3 Wittgenstein, *On Certainty*, Basil Blackwell, Oxford, 1969, p65.

註4 この場合、「W」によってWを意味する」という表現によって、クリプキが取り扱ってきた「〈+〉」によって〈プラス〉を意味する」とか、「〈プラス〉」によって加法を意味する」等の表現のことを指している。

註5 ウィットゲンシュタインの「探究」の成立の過程を詳細に調べ上げたものとして、G. H. von Wright, *Wittgenstein*, Basil Blackwell, Oxford, 1982 がある。その書の内容が、*The Origin and Composition of the Philosophical Investigations* において叙述されている。G. H. von Wright によれば、「探究」の初期版は、主として、1936年の秋と1937年の秋とに書かれた二つの部分から成り立っている。この二部は全体として首尾一貫して作成されている。一部は、最終版の188節までに対応しており、二部は、最終版に組入れられていない〔その主な内容は「数学の基礎」、1部として死後出版された〕。1944年に中間版を作り、1954年1月最終版の序文を書いた。この版は初期版の一部の改定と1944年に書かれたものから成り立っている。後者の内容は、最終版の189—421節までにまたがっている。1945年の夏、ウィットゲンシュタインは「考察1」と彼が呼んだタイプ(TS 228)を準備している。これは初期の草稿、つまり1931年にまで遡る草稿をも含めたもので、それを中間版に組入れている。400以上の節が最終版の「探究」の1部に加えられている。したがって、1部が693節から成り立っているの、その半分以上がこのとき組入れられたことになる。

初期版の1部がTS 220である。それには188節まで含まれている。「探究」の1部の最終タイプ草稿がTS 227であるが、初期版と最終版との間に中間版があったことが想定されている〔ウィトゲンシュタインは1950年ウィーンを訪問したさい、草稿の焼却を指示している。したがって、中間版もこのなかに含まれると想定される〕。これが「考察1」と呼ばれたもので、そのうちの最初の231の諸節がMS 116のうちの3分の1から選択されたもので、その他、TS 213, MS 114, MS 117, MS 119, MS 116, MS 130などから選ばれているのである。「考察1」は全部で698節から成っているが、そのうち、およそ400の諸節が「探究」1部に入れられている。G. H. von Wright によるこの「考察1」を巡った考証に従えば、草稿は27種類にも及び、書かれた時期も1930年にまで溯るものがある。ペーカーとハッカーの「探究」の史料考証も以上のような複雑な中間版を巡ったものであることのコメントをしておきたい。

- 註6 MS 129はペーカーとハッカーによると、ウィトゲンシュタインのポケットノートの草稿MS 180 (a) において書き込まれたものを含む。このMS 129には「探究」の377—81節にある、「これが赤であるということを私はどのようにして知なのか」という議論と共に201—3節の内容がのせられている。しかし377—81節は中間版にはのっていないということである。ペーカーとハッカーのいう中間版とは、私には「考察1」であるようにおもわれる。
- 註7 この問題に関して、ペーカーとハッカーは、彼らの著、*Wittgenstein, Understanding and Meaning*, Basil Blackwell, Oxford, 1980 において詳しく分析している。
- 註8 MS 165において、ウィトゲンシュタインは私的言語の議論が観念論及び独我論の問題にかかわることを明白に述べている。ペーカーとハッカー、p 23, 脚註参照のこと。
- 註9 ペーカーとハッカーは、さらに次の例を挙げている、「ハステングスが1066年に戦ったという事実は、1066年に起こったのではない。というのは、そのとき起こったのはハステングスの戦いであって、事実ではないからである。それが1066年に起こったという事実は1067年に事実でなくなったのではないし、それは、また1065年に歴史の胎内にあった単なる原一事実であったのでもない」(p 31)。
- 註10 Wittgenstein, *Philosophical Grammar*, pp. 161f, 199f, 212ff。
- 註11 Peacocke もクリプキ同様、規則に関してのコミュニティ見解を主張している。それによれば、「コミュニティ見解は、クルーソーのような人間が私たちのコミュニティ、あるいは他に考えられるあるコミュニティの成員と同様に新しい事例にさいして反応すれば、彼を本当の規則に従う人間とみなすことができる」、Peacocke, *Reply: Rule-following: the Nature of Wittgenstein's Arguments*, [S. Holtzman and C. Leich (ed.), *Wittgenstein: to follow a rule*, Routledge and Kegan Paul, London, 1981, pp. 93f]。ペーカーとハッカー、p 38, 脚註参照。
- 註12 MS 124 pp. 213, 221参照。また、MS 116, 117に〈孤立において考察された〉クルーソーのことばについての議論があり、そこでは、ウィトゲンシュタインは主観的な理解と客観的な理解との区別を吟味している。クルーソーは独りで言語ゲームをすることができ、と彼は述べている。もし人がクルーソーの用いている記号使用の有様を観察し、そして人がクルーソーの記号使用の一連の行動にある種の複雑な規則性を見い出すことができれば、人はクルーソーが自分自身のことばを用いていると正しく判断するであろうと述べている。ペーカーとハッカー、p 41の脚註参照。

[旭川医科大学 哲学]